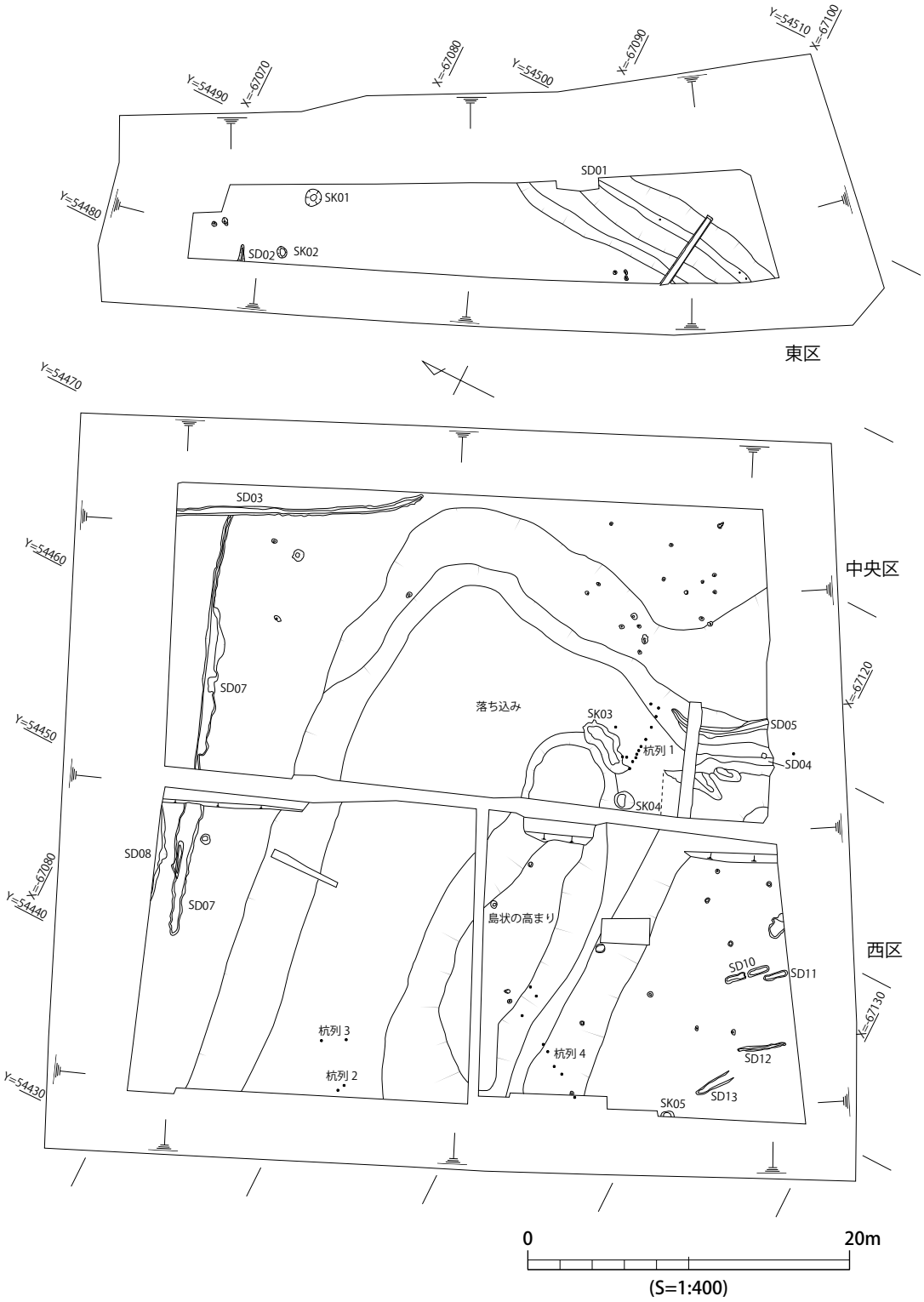
第３節　７区⑤の調査

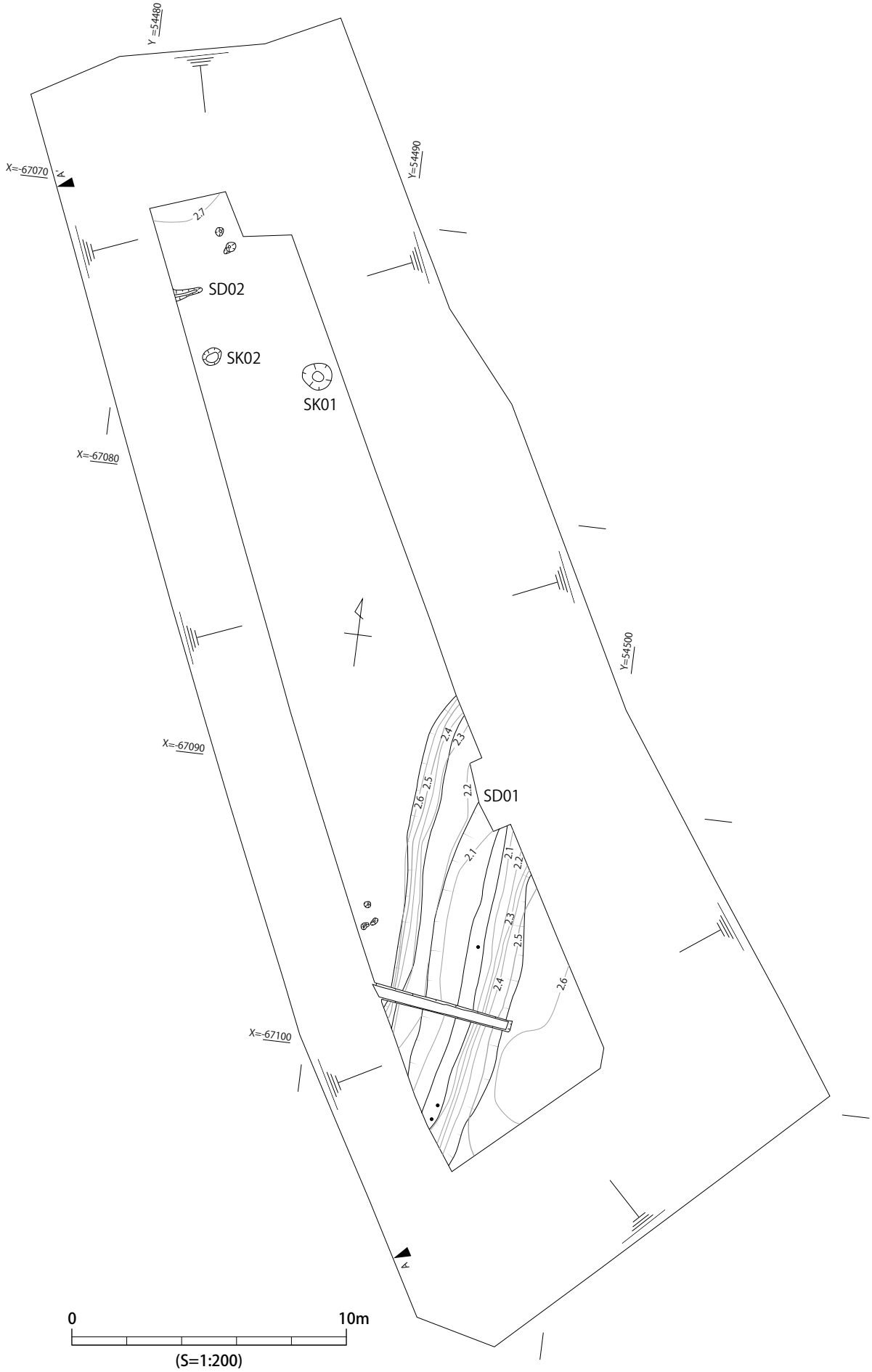
１．調査の経過

７区⑤は、７区③の西側に位置する調査区で、平成 21 年度に調査を実施した。発掘調査面積は 2,680㎡である。

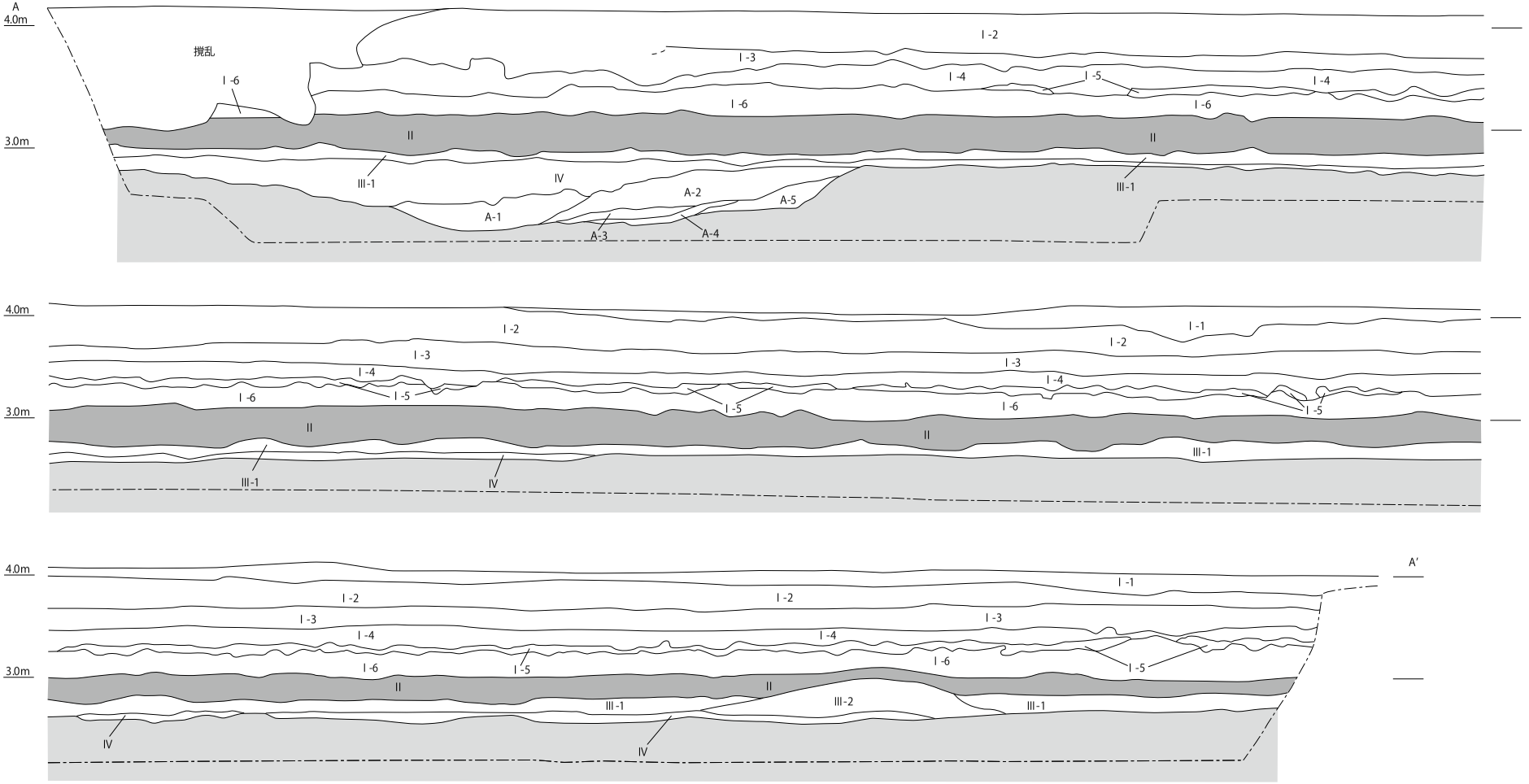
排土処理の面から、調査区を一度に掘り下げるのは困難であり、また、東側の方で工事が急がれたため、調査区を東区、中央区、西区の３つに細分し、東区から順に調査を行うこととした。



第 152 図　７区⑤全体図



第 153 図　7 区⑤東区遺構図



Ⅰ-1　客土
Ⅰ-2　淡黄色粘質土　2.5Y6/2　耕作土
Ⅰ-3　暗灰黄色粘質土　2.5Y5/2
Ⅰ-4　黒褐色粘質土　2.5Y3/1　灰黄色粘質土まだらに入る。
Ⅰ-5　灰白色細砂　2.5Y8/2
Ⅰ-6　暗青灰色粘質土　5BG4/1　黒褐色まだらに入る。
Ⅱ　黒褐色腐植土　10YR3/1　いわゆるオモカス層
Ⅲ-1　褐灰色粘質土　10YR4/1　1㎝大の白色粒を含む。
Ⅲ-2　灰色粘質土　5Y4/1　白色粒含まない。畦畔盛土？
Ⅳ　黒色粘質土　2.5Y2/1

A-1　黒褐色粘質土　2.5Y3/1　やや砂混じる。木片、植物遺体を多く含む。
A-2　黄灰色シルト　2.5Y4/1　粘性あり。
A-3　灰色細砂　5Y5/1　黒色粘質土が薄く互層じょうに入る。
A-4　オリーブ黒色粘質土　5Y3/1
A-5　褐灰色シルト　10YR4/1　若干細砂入る。粘性あり。

0　2m
(S=1:60)

第154図　7区⑤東区西壁土層断面図

平成21年5月19日から、東区で重機による表土掘削を開始し、近世以降の水田耕作土や造成土、黒色腐植土層の大部分を除去した。5月27日から人力による遺物包含層の掘削をはじめ、6月8日から灰色シルト層上面で遺構検出作業を行った。東調査区では古墳時代中期の溝や土坑などを検出し、6月25日にはこれらの調査を終え、調査区の埋め戻しを始めた。

東調査区の埋め戻し後、中央調査区において重機による表土掘削を行い、7月9日から人力による遺物包含層の掘削を開始した。調査の過程で、調査区内に広い範囲で落ち込み状の地形があることが分かったため、土層観察用のベルトやサブトレンチを設定しながら、遺物包含層の掘削を行った。遺物包含層では、落ち込みを中心に古墳時代中期を主体とする遺物が出土した。8月末頃から9月初旬にかけて灰色シルト層上面で遺構の検出・掘削・記録を行い、9月7日にはラジコンヘリコプターで空中写真撮影を実施した。これまでに調査区周囲の排水溝で灰色シルト層中から遺物が出土してたため、下層において遺物・遺構の確認を行うことを目的に、9月8日から灰色シルト層の掘り下げを行った。弥生時代後期後葉の土器群をなど一定量の遺物は出土したが、遺構は確認できず、9月18日に下層の調査を終了した。

西区は、9月27日から人力による遺物包含層の掘削を開始した。この調査区でも中央区で検出した落ち込みが続いているため、土層ベルトやサブトレンチを設定しながら調査を進めた。落ち込みを中心に古墳時代中期の遺物が出土している。11月中旬で灰色シルト層上面の遺構・地形測量・調査区の写真撮影を終えた。11月16日から下層における遺構・遺物の有無を確認するためシルト層の調査を行ったが、土器が若干出土したのみで、11月20日に掘削作業を終了し、11月25日に調査区壁面の土層を記録して、7区⑤について全ての現地調査を終了した。

2．基本層序（第154・162・163図）

調査区の基本層序は大きく見て5つに大別した。

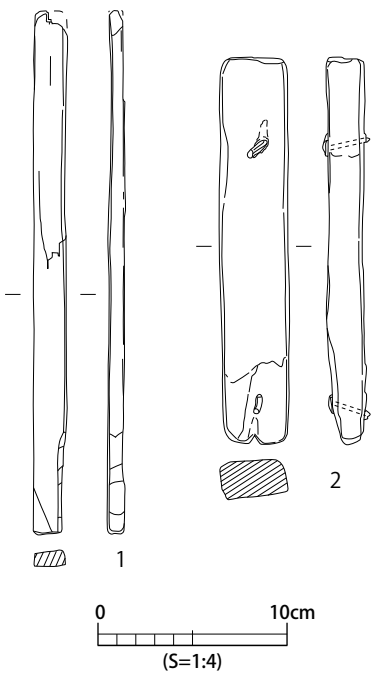
Ⅰ層は、水田耕作土など近世以降に堆積したと考えられる層である。このうち第154・162・163図のⅠ－5層は河川の氾濫よる堆積層と考えられ、他の調査区でも同様の層が認められる。

Ⅱ層は、未分解の植物質のものが堆積した黒色系の腐植土層で、「オモカス層」とも呼ばれる。他の調査区でも同様ものがある。

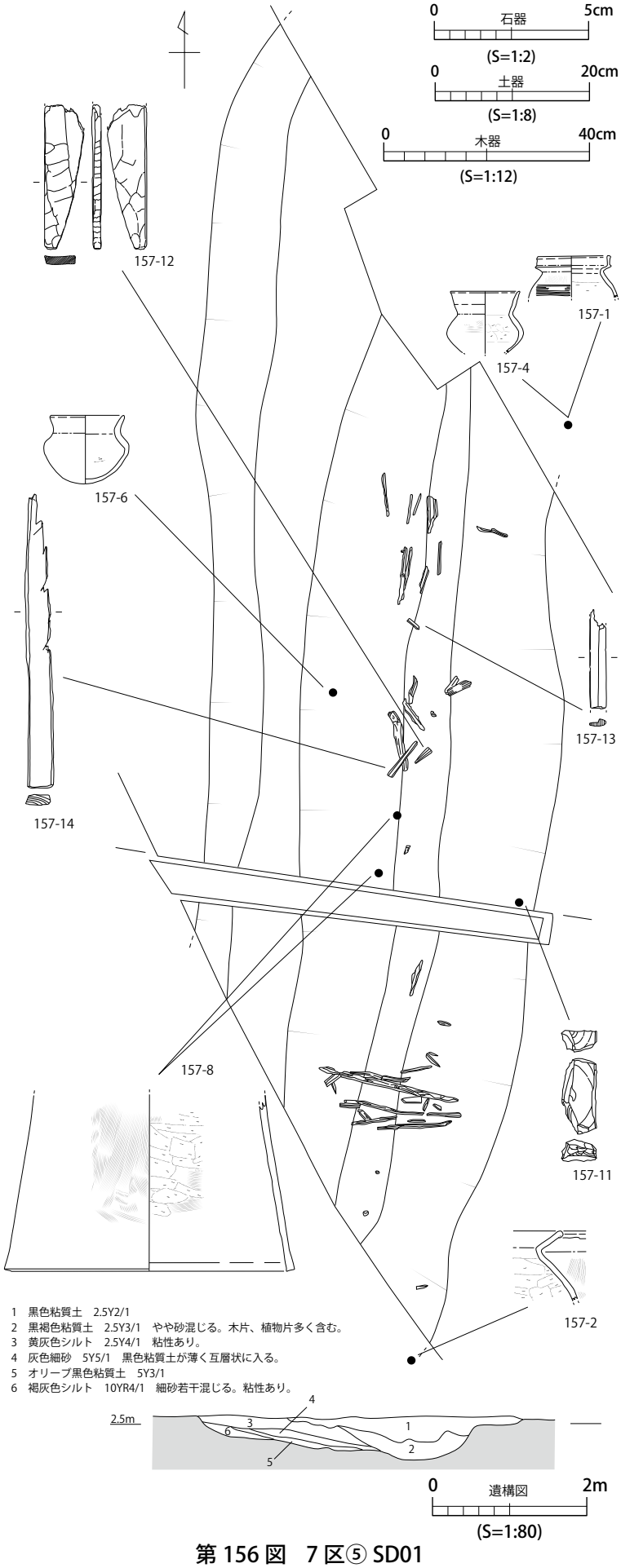
Ⅲ層は、Ⅳ層と比べやや灰色みを帯びた粘質土層で、部分によっては径1㎝大の白色～黄褐色の砂質土粒塊を含んでいる。古代～中世の耕作土と考えられる層で、須恵器片などが少量ながら出土している。なお、第154・162・163図の土層のそれぞれの北端付近で畦状の高まりが観察でき、これらを結ぶかたちで畦畔が存在した可能性がある。

Ⅳ層は、主に古墳時代の遺物を含む層である。黒色系の粘質土を中心とするが、落ち込み内には砂質土や砂も堆積している。

Ⅴ層は灰色シルト系堆積層で、前述したようにこの上面で遺構を検出している。この調査区では弥生土器が若干だが出土しており、中央区では弥生時代後期後葉の土器群も存在している。



第155図　7区⑤東区Ⅱ・Ⅲ層出土遺物



第 156 図　7 区⑤ SD01

3．東区の調査

前述したように 7 区⑤は、3 つの区に細分して調査を実施しているが、遺構の連続性などを考慮して、本節では東区と、中央・西区に分けて記述する。

（1）Ⅱ・Ⅲ層の調査（第 155 図）

本調査区ではⅡ層の大部分は重機で除去し、Ⅲ層から遺物包含層とみなして調査している。なお、Ⅲ層上面及びⅢ層下面（Ⅳ層上面）では遺構埋土と基盤層の判別は困難であると考え、遺構検出作業は行っていない。

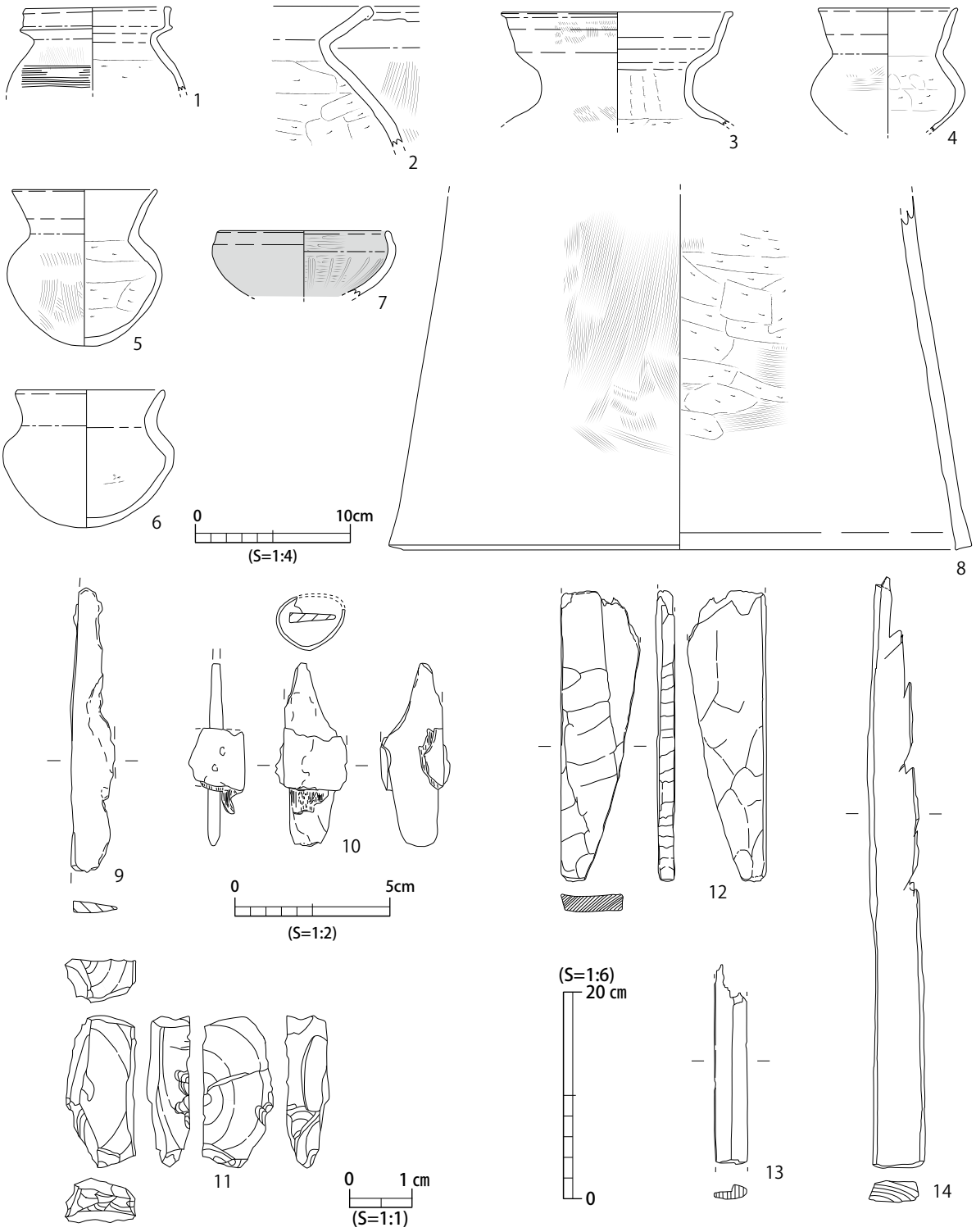
1 は、Ⅱ層から出土した板状木製品で、基部は方形で、頭部は丸みを持ったかたちに加工されている。2 は、Ⅲ層出土のもので、厚みのある方形の板状木製品である。両端に寄った 2 か所に鉄釘が打ち込まれている。

（2）Ⅳ層～Ⅴ層上面の調査

東区ではⅣ層の堆積は 5 cm ～ 10㎝と薄く、遺物は古式土師器・土師器が若干出土したのみであった。Ⅴ層上面では溝・土坑などの遺構を検出している。

SD01（第 156・157 図）　調査区の南側で検出された、南北方向にのびる幅約 4 m の溝で、北側は隣接する 7 区③の SD01 と連続し、南側は調査区外にのびている。

土層の堆積は大きく 2 段階に分けられる。まず、第 156 図の 3 ～ 6 層が堆積し、それらを切るかたちで 1・2 層が堆積している。



第 157 図　7 区⑤ SD01 出土遺物

溝の掘り直しがされたものと推測でき、この遺構の西岸がステップ状になっているのも掘り直しと関連するものと考えられる。埋土には砂などの堆積が見られることから流路跡と考えられる。本調査区では水流の方向は判断できなかったが、7 区③の調査では北から南への流れていた、とされている。

第 157 図は SD01 の埋土中から出土した遺物である。

1 は複合口縁の甕で、古墳時代前期でも新しい様相を示す。2 は単純口縁の甕で口縁端部が外側に折り返されている。3 は退化した複合口縁の壷、4 ～ 6 は小型丸底壷である。7 は高坏の坏部で、

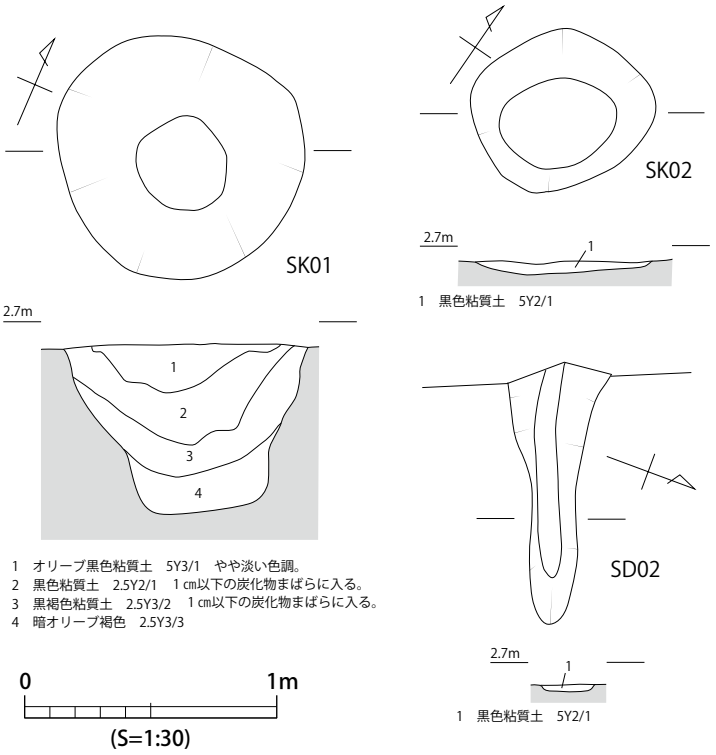
内外面にベンガラが塗布されている。3～7は古墳時代中期に属する。8は甑形土器である。

9・10は刀子で、9は刃部側、10は茎から刃部基部にかけての破片である。10には鎺金具や柄の木質が残っている。

11は碧玉の管玉未成品で、工程上では細割段階のものである。

12～14は板状木製品である。12は、一方の長側縁が斜め方向のび、端部がすぼまった形になる。11は片面に段を持ち、12は片側の長側縁に多数の切り込みが入っている。

遺物からSD01は古墳時代中期の遺構と考える。このことは7区③の調査成果とも矛盾しない。



第158図　7区⑤ SK01･02，SD02

SK01（第158図）　調査区北側、L 17グリッドに位置する、径1 m、深さ0.65 mの不整円形の土坑である。出土遺物はないため、時期は不明である。

SK02（第158図）　調査区北側、L 17グリッドに位置する、長径0.75 m、短径0.7 m深さ0.05 mの不整楕円形の土坑である。出土遺物はないため、時期は不明である。

SD02（第158図）　調査区北側、L 17グリッドに位置する。現存長1 m、幅0.2～0.4 m、深さ0.03 mの溝で、西側は調査区周囲に掘った排水溝で切られている。出土遺物はない。中央区・西区で検出されたSD07の延長上にあり、調査区壁面で観察できる「畔状遺構」の推定部分とほぼ重なることから、これらに関連する可能性を考えておきたい。

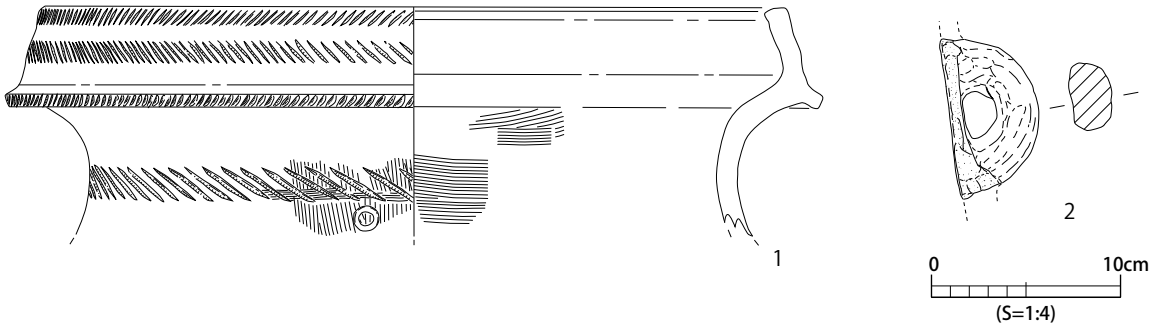
出土遺物（第159図）　1は古式土師器の壷で、内傾する口縁部にはヘラ状工具の刺突による羽状文が、口縁部下端に突出部には刺突文が施されている。また頸部にも刺突文や円形竹管文が見られる。西部瀬戸内系土器に見られる器形をしているが、文様の点では異なり、在地との折衷形態と考えられる。2は甑形土器の把手である。

（3）Ⅴ層の調査（第160図）

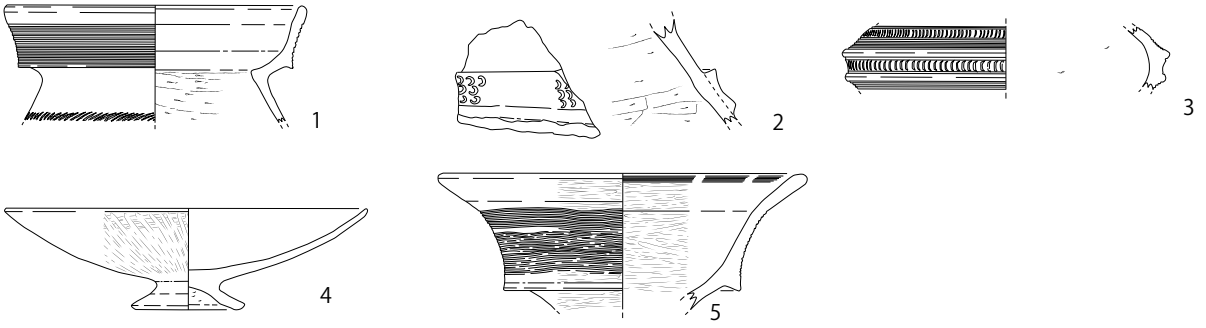
東区ではⅤ層の面的な発掘はしていないが、調査区周囲に排水溝を掘削した際に若干の弥生土器や木製品がⅤ層から出土している。

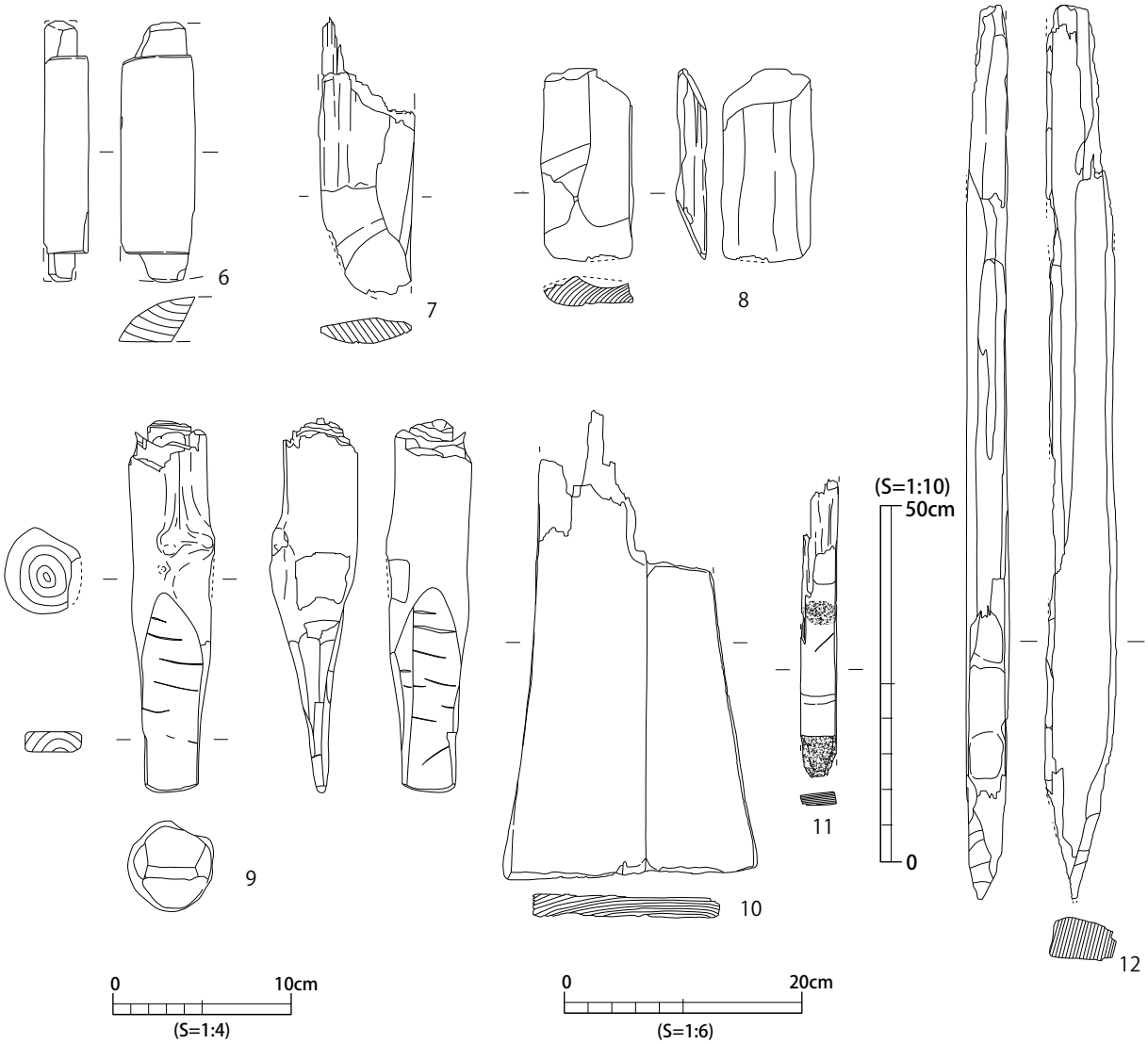
1～5は弥生時代後期～古墳時代前期頃の土器である。1は甕、5は鼓形器台で、Ⅴ-3様式のものである。2は壷の肩部とみられるもので、幅広の突帯に半截竹管文が施されている。3は装飾壷の胴部で、爪形の刺突文や平行直線文が入る。4は低脚坏である。

6～12は木製品である。6は断面が扇形しており、両端部にほぞ状の突出を持つ。7・8は木材の加工時に出た削り屑であろうか。9は丸太材を加工したもので、一方はマイナスドライバーの先端のように作り、もう一方は周囲から切り込みを入れて切断している。10・11は板状の木製品



第 159 図　7 区⑤東区Ⅳ層出土遺物





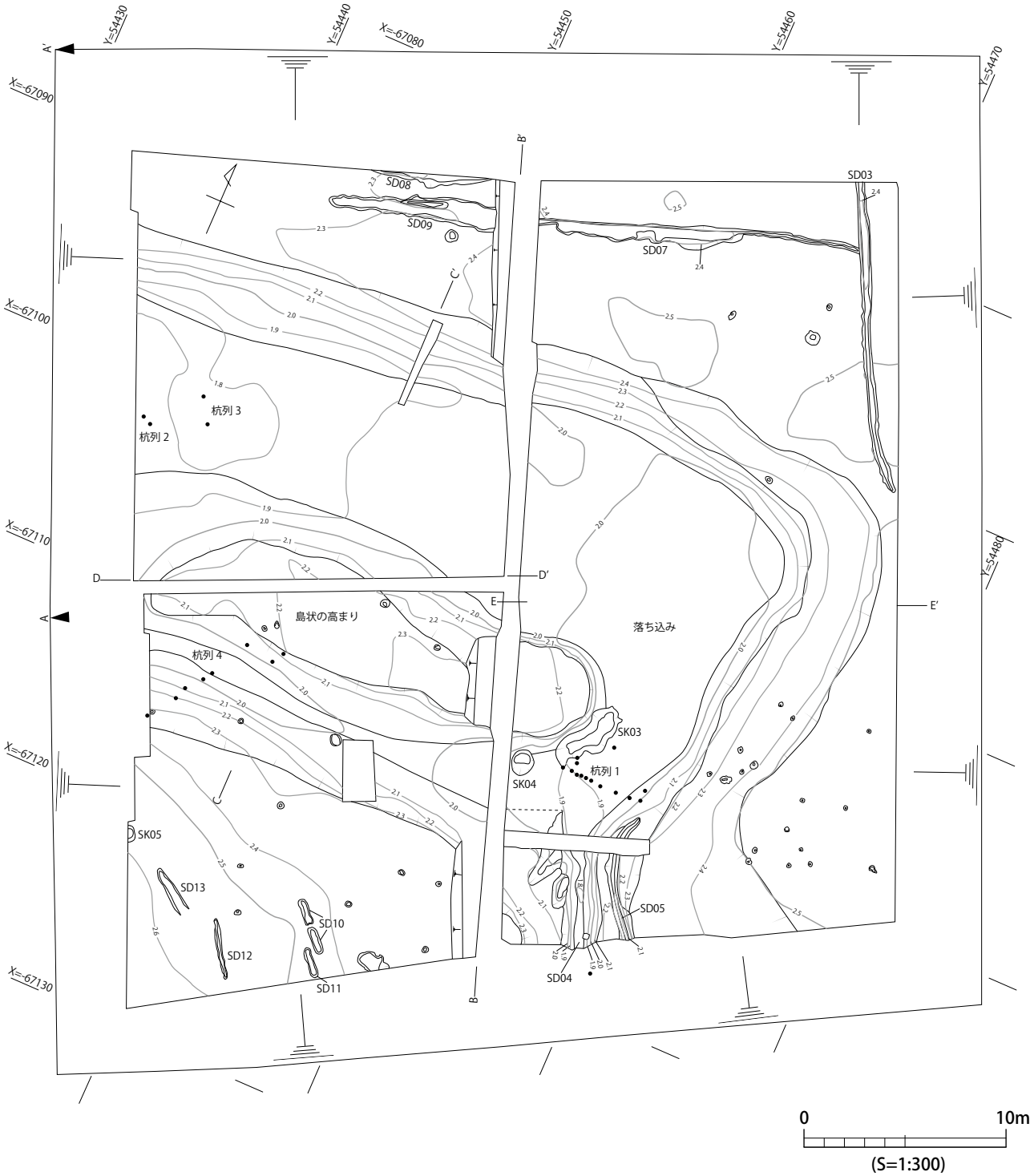
第 160 図　7 区⑤東区Ⅴ層出土遺物

である。12 は現存長が 130㎝の大型の杭で、断面は不正長方形になっている。

4．中央・西区の調査

（1）Ⅲ層の調査（第 165・166 図）

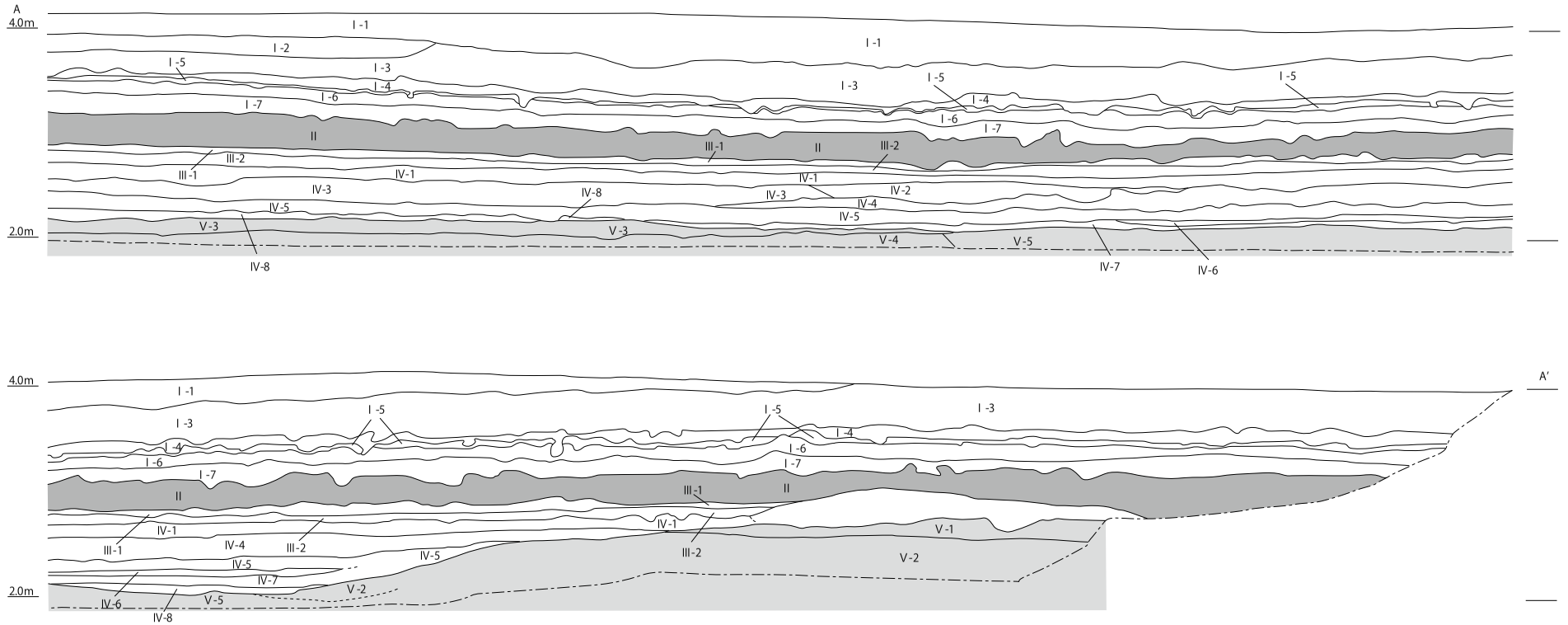
中央・西区においてもⅡ層の大部分は重機で除去し、Ⅲ層から遺物包含層とみなして調査している。なお、Ⅲ層上面及びⅢ層下面（Ⅳ層上面）では遺構埋土と基盤層の判別は困難であると考え、遺構検出作業は行っていない。



0　10m
(S=1:300)

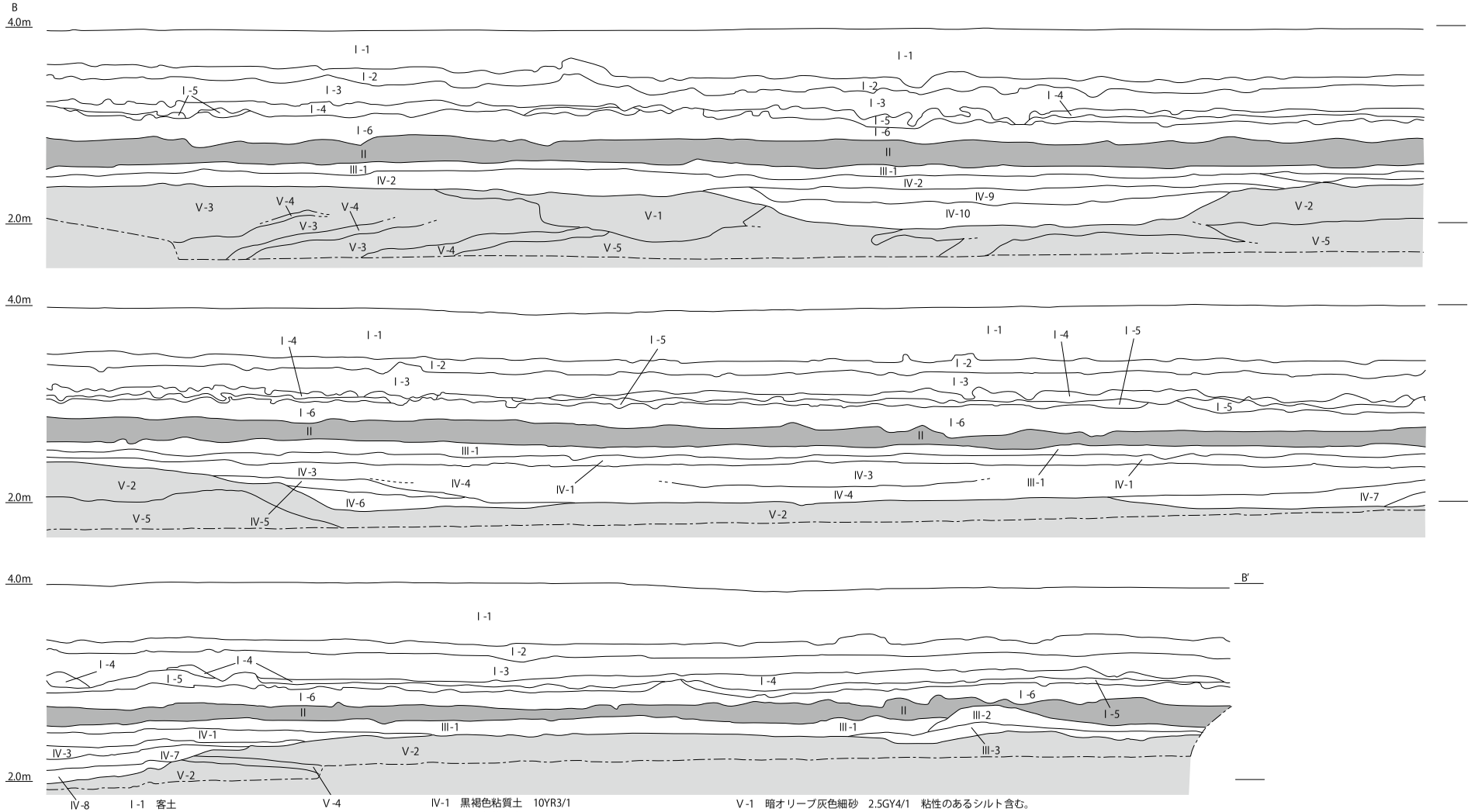
第 161 図　7 区⑤中央・西区遺構図

第162図　7区⑤中央・西区 A-A' 土層断面図



Ⅰ-1　客土
Ⅰ-2　灰黄色粘質土　2.5Y6/2
Ⅰ-3　暗灰黄色粘質土　2.5Y5/2
Ⅰ-4　黒褐色粘質土　2.5Y3/1
Ⅰ-5　浅黄色細砂　2.5Y7/4
Ⅰ-6　暗青灰色粘質土　5BG4/1
Ⅰ-7　灰色粘質土　5Y4/1　黒色粘質土がまだらに入る。
Ⅱ　黒褐色腐植土　2.5Y3/1　腐植土層
Ⅲ-1　褐灰色粘質土　10YR4/1　植物質のもの多く含む。粒含まない。
Ⅲ-2　褐灰色粘質土　10YR4/1　1㎝以下の黄白色の粒多く含む。
Ⅳ-1　黒褐色粘質土　10YR3/1
Ⅳ-2　オリーブ黒色粘質土　5Y3/2　粘性あり。
Ⅳ-3　暗オリーブ色砂質土　5Y4/4　0.5㎜以下の細かい砂を多く含む。粘性あり。
Ⅳ-4　灰オリーブ色砂質土　5Y4/2　黄白色砂質土がまだらに入る。粘性あり。
Ⅳ-5　黄灰色砂質土　2.5Y4/1　粘性あり。
Ⅳ-6　灰色粘質土　5Y5/1
Ⅳ-7　褐灰色砂質土　10YR4/1　Ⅳ-5と比べ若干砂っぽいが粘性あり。
Ⅳ-8　暗灰黄色細砂　2.5Y5/2
Ⅳ-9　灰色細砂　5Y6/1と褐灰色砂質土が入り混じった層。
Ⅴ-1　暗灰黄色シルト　2.5Y5/2
Ⅴ-2　灰色シルト　2.5Y5/1
Ⅴ-3　灰色砂質土　2.5Y5/1
Ⅴ-4　黒色粘質土　10YR2/1
Ⅴ-5　灰色　5Y4/1・灰白色砂　5Y7/2

第163図　7区⑤中央・西区 B-B' 土層断面図

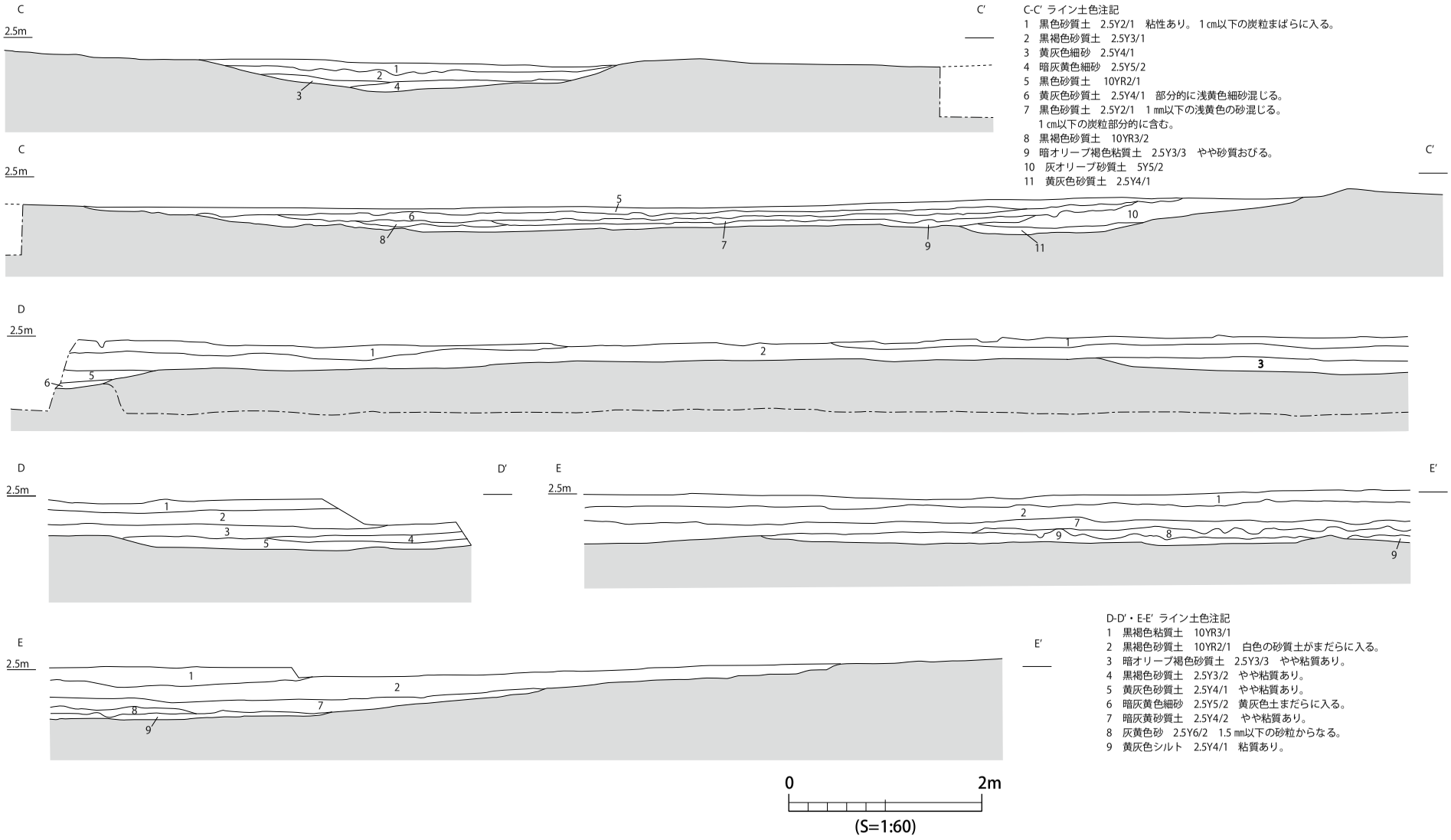


I -1　客土
I -2　灰黄色粘質土　2.5Y6/2　耕作土
I -3　暗灰黄色粘質土　2.5Y5/2
I -4　黒褐色粘質土　2.5Y3/1　灰黄色粘質土まだらに入る。
I -5　灰白色細砂　2.5Y8/2
I -6　暗青灰色粘質土　5BG4/1　黒褐色土がまだらに入る。
II　黒褐色腐植土　10YR3/2　腐植土層。
III-1　褐灰色粘質土　10YR4/1　1㎝大の白色粒を含む。
III-2　灰色粘質土　5Y4/1
III-3　褐灰色粘質土　10YR4/1

IV-1　黒褐色粘質土　10YR3/1
IV-2　暗褐色粘質土　10YR3/3
IV-3　黒色砂質土　10YR2/1
IV-4　暗オリーブ褐色砂質土　2.5Y3/3　粘性あり。
IV-5　黒褐色砂質土　2.5Y3/2　粘性あり。
IV-6　黄灰色砂質土　2.5Y4/1　粘性あり。
IV-7　灰色砂質土　5Y5/1　粘性あり。部分的に粗砂が混じる。
IV-8　黄灰色砂質土　2.5Y4/1　粘性あり。
IV-9　黒色粘質土　10YR2/1　やや砂質帯びる。
IV-10　灰黄褐色砂質土　10YR4/2　粘性少しあり。

V-1　暗オリーブ灰色細砂　2.5GY4/1　粘性のあるシルト含む。
V-2　灰色シルト　5Y5/1～黄灰色細砂 2.5Y5/　シルトと細砂が互層状に入る。
V-3　オリーブ灰色細砂　2.5Y5/1
V-4　灰色シルト　5Y4/1 粘性あり。
V-5　灰白色粗砂　5Y7/2

第164図　7区⑤中央・西区 C-C'・D-D'・E-E' 土層断面図



Ⅲ層では古代を中心とする遺物が出土している。

１・２は弥生土器である。１は注口土器の把手で、断面形は丸い。２は壷の肩から頸部にあたるものと思われ、幅広の突帯に半截竹管文が施されている。東区Ⅴ層で出土した第 160 図２と類似しており、同一個体の可能性がある。１・２は本来下層に含まれていたものが、耕作等による土層の攪拌のためにⅢ層に入り込んだものと推測される。

３～ 12 は古代の須恵器である。３は坏蓋で、宝珠状のつまみが付いていたと考えられる。外面には「邊」と墨書されている。奈良時代のものである。４も坏蓋であるが、天井部外縁に断面台形状の径の大きい輪状つまみが付くもので、当地域ではあまり見られない器形をしている。５～７は坏身である。５は体部が内湾しながら立ち上がるもので、岡田編年の出雲Ⅲ～Ⅳ期に、６は底部周縁よりも内側に高台が付き、体部が直線的に立ち上がるもので、出雲Ⅳ A 期に位置付けられよう。７は底部を欠いており、体部が直線的に立ち上がる。８は皿で、体部は外傾しながら、直線的に立ち上がっている。底部内面には墨書で「林」の文字が記されている。９・10 は壷の口縁部とみられる。11･12 は甕の胴部片で、11 は外面は平行タタキ、内面は同心円の当具で調整され、12 は外面に平行タタキ目、内面下側に同心円当具痕、上側に放射状当具痕が残る。

13 ～ 17 は古代末から中世の土師器皿である。13 は体部が少しだけ内湾気味に立ち上がるもので、口径と底径の差はあまり大きくない。14 は、高台の付くもので、体部が内湾気味に立ち上がり、口縁部は外反している。15 は体部が内湾気味に立ち上がり、口縁部は少し外反している。16 は体部が内湾気味で、口径と底径の差が大きいもの、17・18 は体部が内湾して立ち上がり、口径と底径の差は大きくない。13 は広江編年の第２段階で 11 世紀、15 は第２～第３段階（古）で 12 ～ 13 世紀、14･16 は第３段階で 12 世紀頃、17･18 は第４段階（古）で 13 世紀に位置付られる。

19 は砥石で、正面と２側面、片側の小口面の４面で研磨面が認められる。

20 ～ 22 は木簡状の板状木製品で、20 は端部付近に紐を通すための孔が穿たれている。赤外線カメラを用いて観察したが、文字は認められなかった。

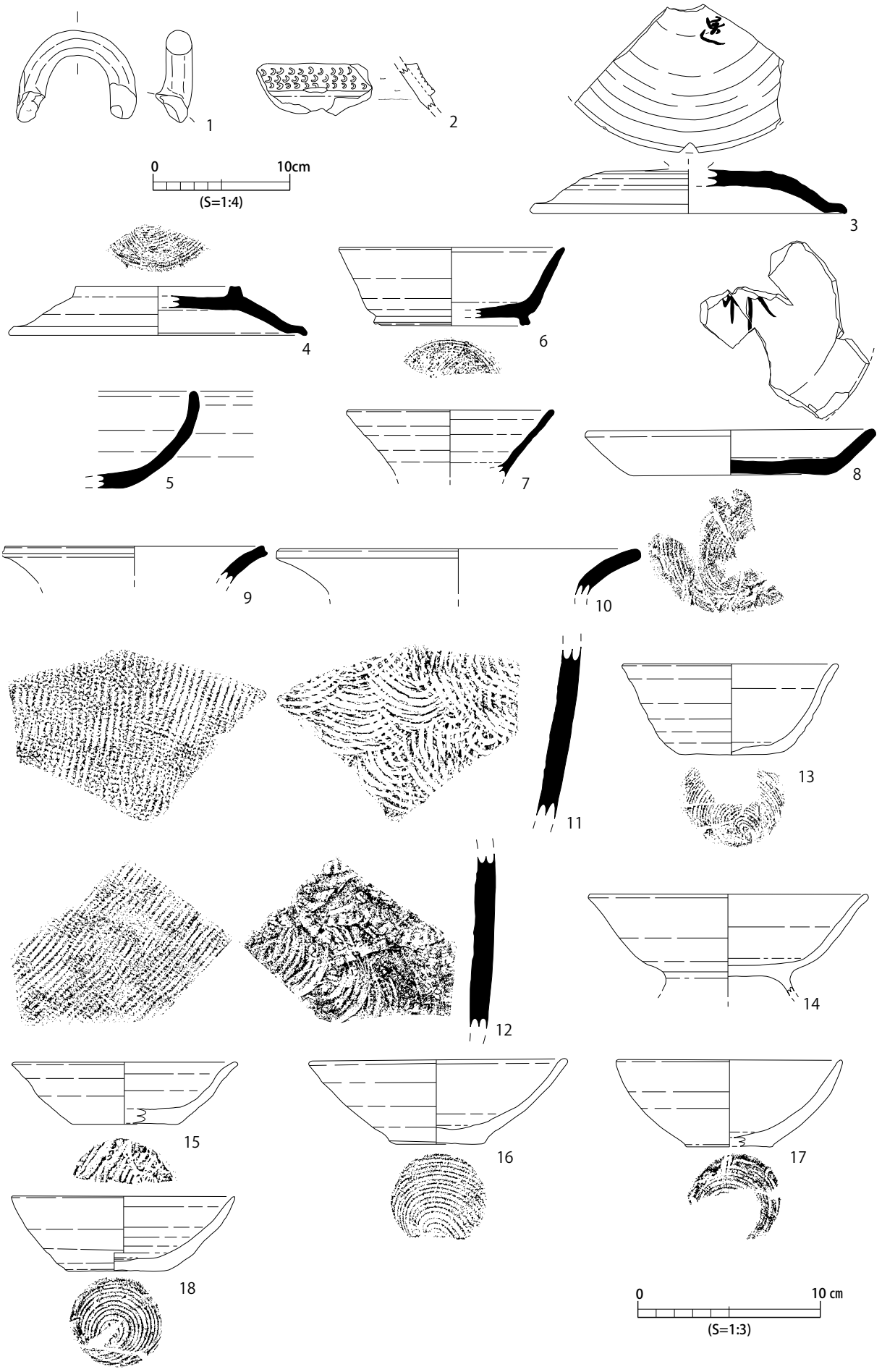
（２）Ⅳ層～Ⅴ層上面の調査

Ⅳ層は古墳時代を中心とする遺物包含層である。この層を掘り上げたのちⅤ層上面で溝・土坑などを検出した。なお、中央・西区では、Ⅴ層上面は平坦ではなく、中央部で落ち込み状になっていた。

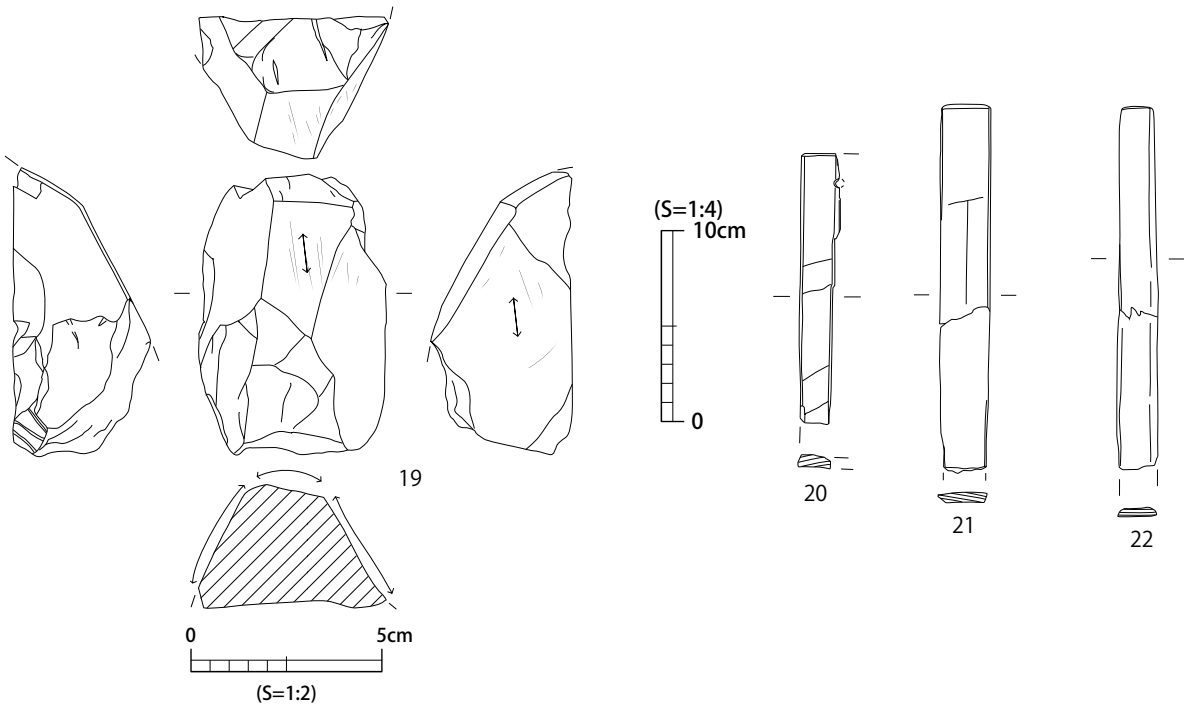
①検出遺構

SD03（第 167 図） 中央区の北東側、K15・K16・L15 グリッドに位置する溝で、N -27° -W 方向にのびている。現状で確認できた長さは 15.3m、幅は 0.4m、深さは 0.06m で、北側はさらに調査区外にのびる。SD07 と切り合っているが、前後関係は判断できなかった。遺物は小片のために図示していないが、古墳時代の土師器片や、古代末～中世の土師器坏もしくは皿の破片が出土しており、遺構の時期は古代末～中世と考える。遺構の性格については、水田に伴うものか、もしくは畦畔の構築に伴う可能性が想定される。

SD07・SD08（第 167 図） SD07 は中央・西調査区の北側、K13 ～ 15 グリッドに位置する溝で、N -70° - E 方向にのびている。SD03 の西側から長さ 26 ｍで確認され、幅は 0.2 ～ 1.3m、深さは 0.08m である。SD08 は、SD07 の北側に平行する溝で、北側は調査区周囲の排水溝で切られており、確認できた長さは６m、幅は 0.75m、深さは 0.1m である。SD07・08 では弥生土器・土師



第 165 図　7 区⑤中央・西区Ⅲ層出土遺物（1）



第 166 図　7 区⑤中央・西区Ⅲ層出土遺物（2）

器片が出土しているが、この遺構に直接伴うものとはいえず、また、小片であるため図示しなかった。SD07・08 は、調査区壁面で観察される「畦状遺構」の想定箇所とほぼ重なっていること、調査区壁面の土層（第 162・163 図）では「畦状遺構」下の片側、あるいは両側に落ち込みが確認でき、これらに対応する可能性が高いことから、畦畔の造成に伴う整地段階で掘られた溝であるか、畦畔に先立つ地割等に伴う溝と推測される。遺構の時期は、Ⅲ層の出土遺物から古代～中世前半と考える。

SD10 ～ 13（第 168 図）　西調査区の南側、G13・G14 グリッドに位置する。

SD10 は 2 本の溝のようもに見えるが、直線的に並んでおり、本来一連のものであった可能性が高い。N -44° - W方向にのびており、規模は、全体の長さが 2.9m、幅は 0.4m、深さは 0.06m である。

SD11 は、SD10 の南西に位置し、N -42° - W方向にのびており、SD10 とほぼ平行する。長さは 1.5m、幅は 0.3m、深さは 0.05m である。

SD12 は、SD10 から約 4.5 m西に位置する。N -34° - W方向にのびており、SD10 に対し少し東に振れている。長さは 3 m、幅は 0.35m、深さは 0.05m である。

SD13 は、SD11 から約 1.5 m北西に位置している。N -56° - W方向にのび、SD10 に対してやや西側に振れている。長さは 2.5m、幅は 0.5m、深さは 0.03m である。

SD11 から弥生時代後期の土器片が、SD13 から土師器片が出土しているが、小片であり、この遺構に直接伴うものか不明である。遺構の性格は不明であるが、4 区などで畝間の溝が検出されており、それらに類するものかもしれない。

SD04・05（第 169・170 図）　SD04 は中央区の南側に位置し、落ち込み状地形の南東隅にとりつくかたちに掘られた溝である。南側は調査区外にのびており、現状で確認できた長さは 6.5m である。溝の幅はどのようにとらえるか問題があるが、落ち込み上端の延長上にある緩やかな傾斜変換線で計測するなら約 12m、SD05 の東側の傾斜変換線でとらえるなら約 4 m、内側の急な傾斜がはじまる変換線で計測するならば約 2 m ということになる。底面の標高は、第 169 図 A - A '

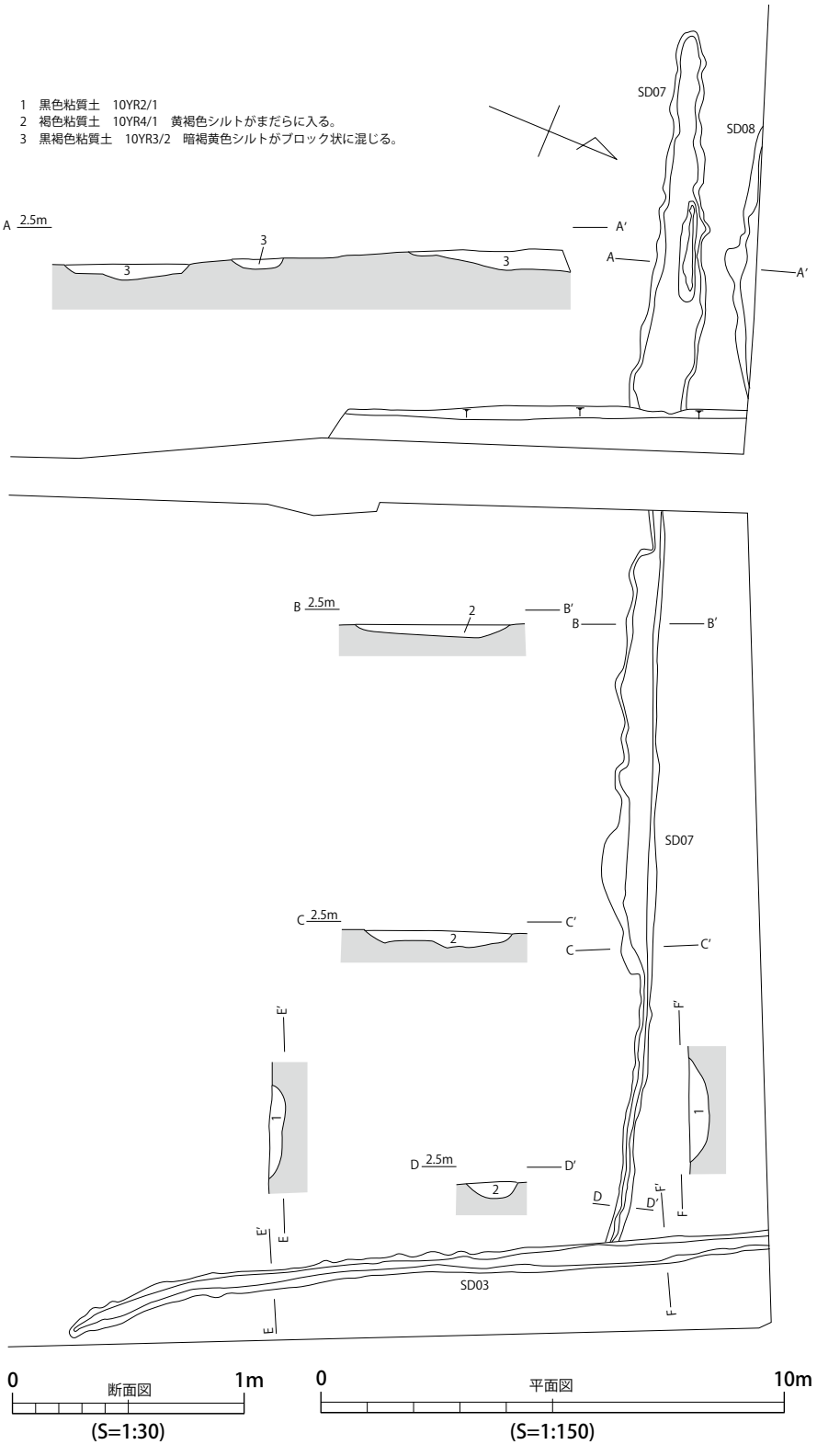
で 1.86m、Ｂ - Ｂ ’ で 1.78m である。埋土には、黒色粘質土と細砂が見られることから、滞水状態のときと流水状態のときがあったと推測される。

SD05 は、SD04 東側の斜面に弧状にのびる溝で、長さは 6.2m、幅は 0.6m、深さは 0.3m である。埋土として黒褐色の細砂～砂質土が堆積している。

SD04・05 で出土した遺物を第 170 図に図示した。

１は古式土師器の甕で、口縁端部が肥厚していることから、草田 7 期のものと考えられる。

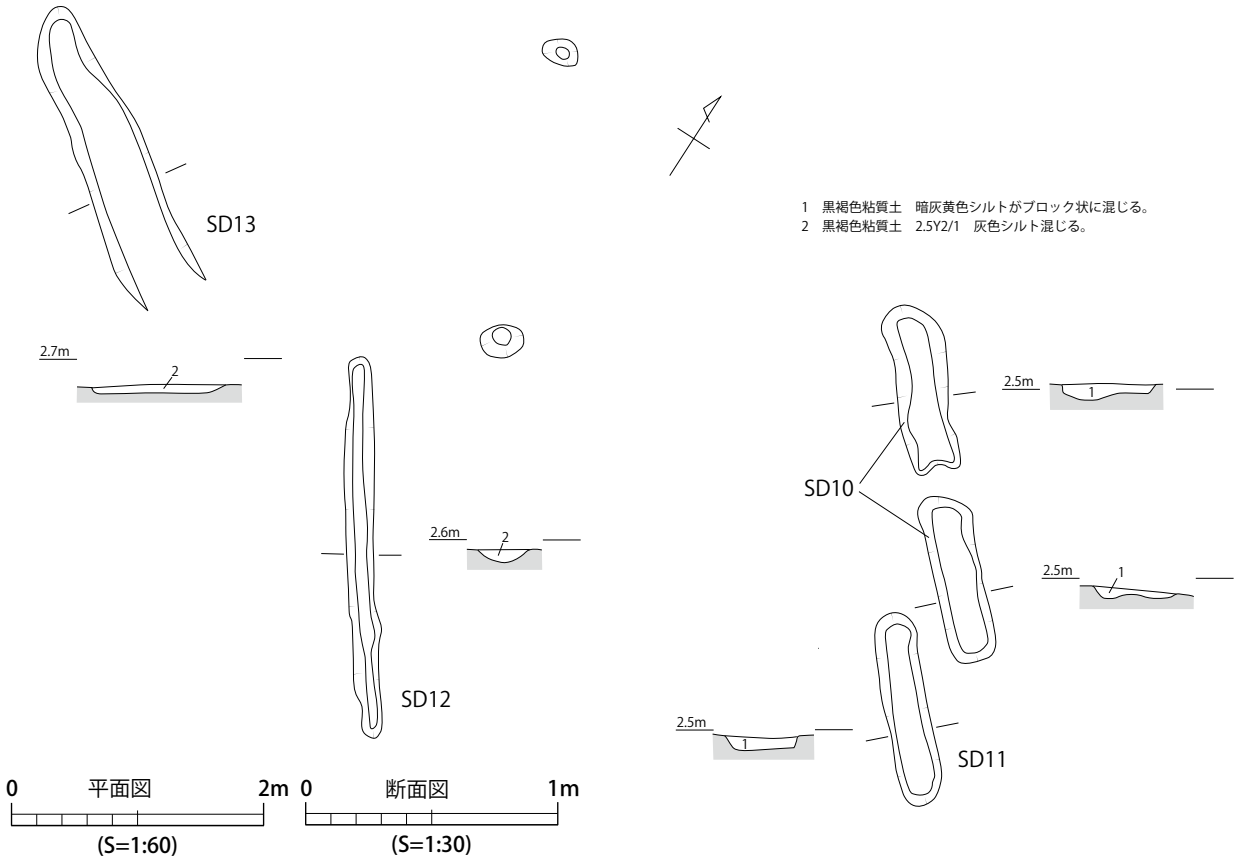
２～７は土師器である。２は退化した複合口縁の甕で、SD04・05 で出土したものが接合している。３は小型丸底壷で、口縁部よりも胴部最大径の方が少し大きい。４～６は高坏である。４・５は体部と口縁部の境に稜を持つものであるが、



第 167 図　7 区⑤ SD03・07・08

４は坏部と脚部を別々に製作したものを接続したものであるのに対し、５は坏部底に塊状の粘土を充填して脚部と接続している。６は脚部の低い高坏である。７は坏で、底部外面には粗いヘラケズリ痕が残る。４・５は外面全体及び坏部内面、６の外面全体、７の内外面全面には赤色顔料（ベンガラ）が塗布されている。２～７は古墳時代中期のものと考えられる。

８・９は須恵器である。８は口縁端部を欠くが、大谷編年の出雲 1 期に遡る可能性を持つ。底



第 168 図　7 区⑤ SD10 ～ 13

部には右回転のヘラケズリがされている。9 は鉢で、口縁部上・下段に波状文が施されている。これも 1 期のものであろう。

10 ～ 12 は木製品である。10 は矢板で、SD04 の東側斜面の下端付近に打ち込まれていたものである。12 は、SD04 の東側斜面下端に沿うかたちで出土した。長楕円形の断面形を持つ棒状の木製品で、何かの柄に使用されたものかもしれない。材はエノキ属である。11 は SD04 の推定延長上の土中に刺さって出土した矢板で、SD04 の埋没後に打ち込まれたものと推測する。

出土遺物から SD04・05 は古墳時代中期に属すると考えられる。

落ち込み状の地形（第 164・171 ～ 174 図）　中央・西区の東西約 40m、南北約 24m の範囲で、Ⅴ層上面が落ち込んだ状態になっていることが確認できた。落ち込み底面の標高は 1.8 ～ 2.0m で、落ち込み上端との比高差は 0.3 ～ 0.5m 程度である。落ち込みの中央から南に偏った位置には、長さ 24 m以上、幅 7m の島状の高まりがあり、このもっとも高い部分の標高は 2.3m である。落ち込み埋土には砂の堆積も部分的に見られることから、水が流れていた時期もあったと推測される。

遺物は落ち込みの全体で出土しているが、北側から東側にかけて多く、南側はやや少ない。北西側では流木が埋土中でまとまって検出された部分があり、流木の多くは落ち込みに対してほぼ直交する方向で出土している。

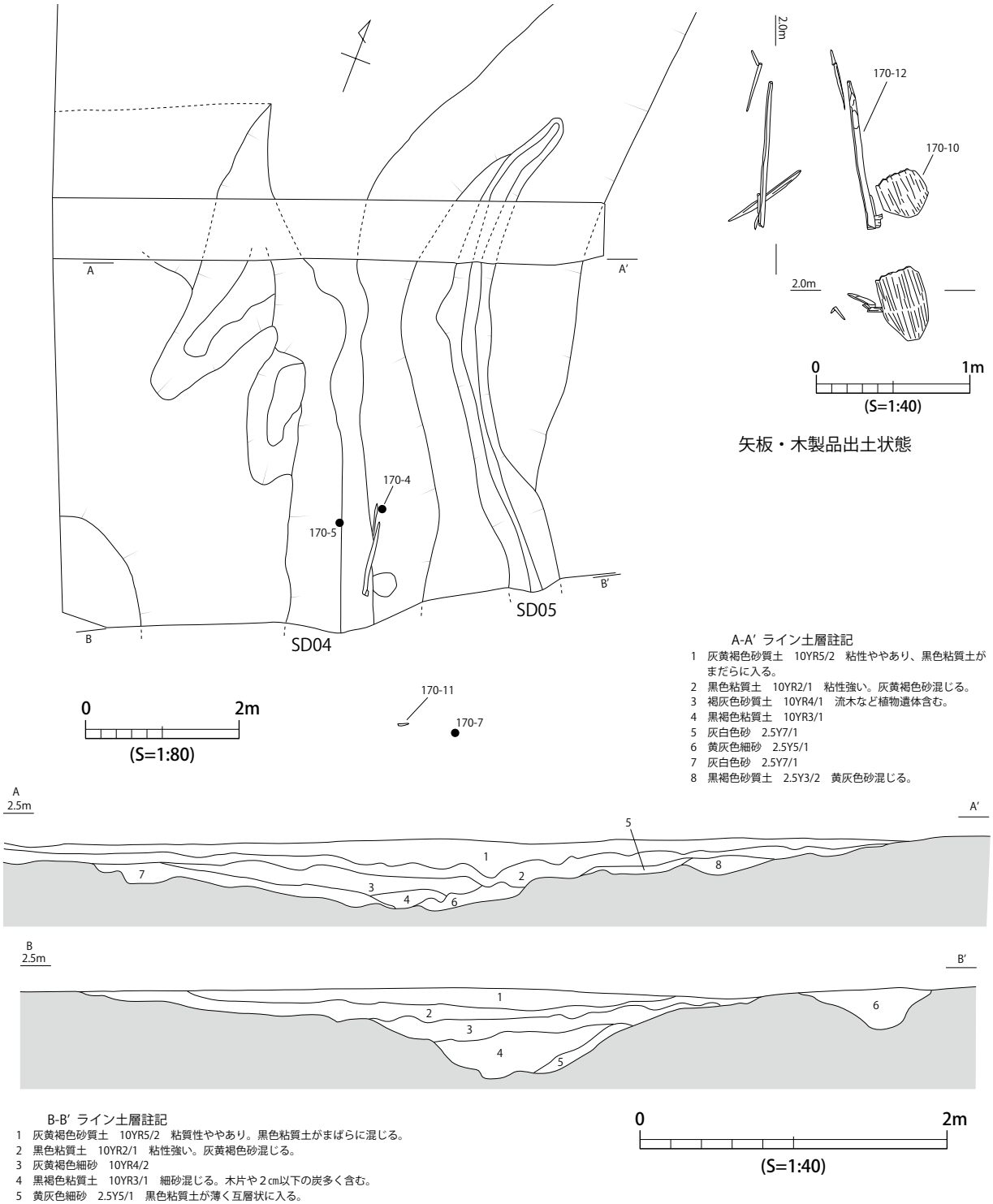
第 172 ～ 174 図は落ち込みから出土した遺物である。

1・2 は弥生土器である。1 は器台で、平行直線文や貝殻による刺突文、羽状文が巡る。2 は平底の底部で、焼成後に穿孔されている。

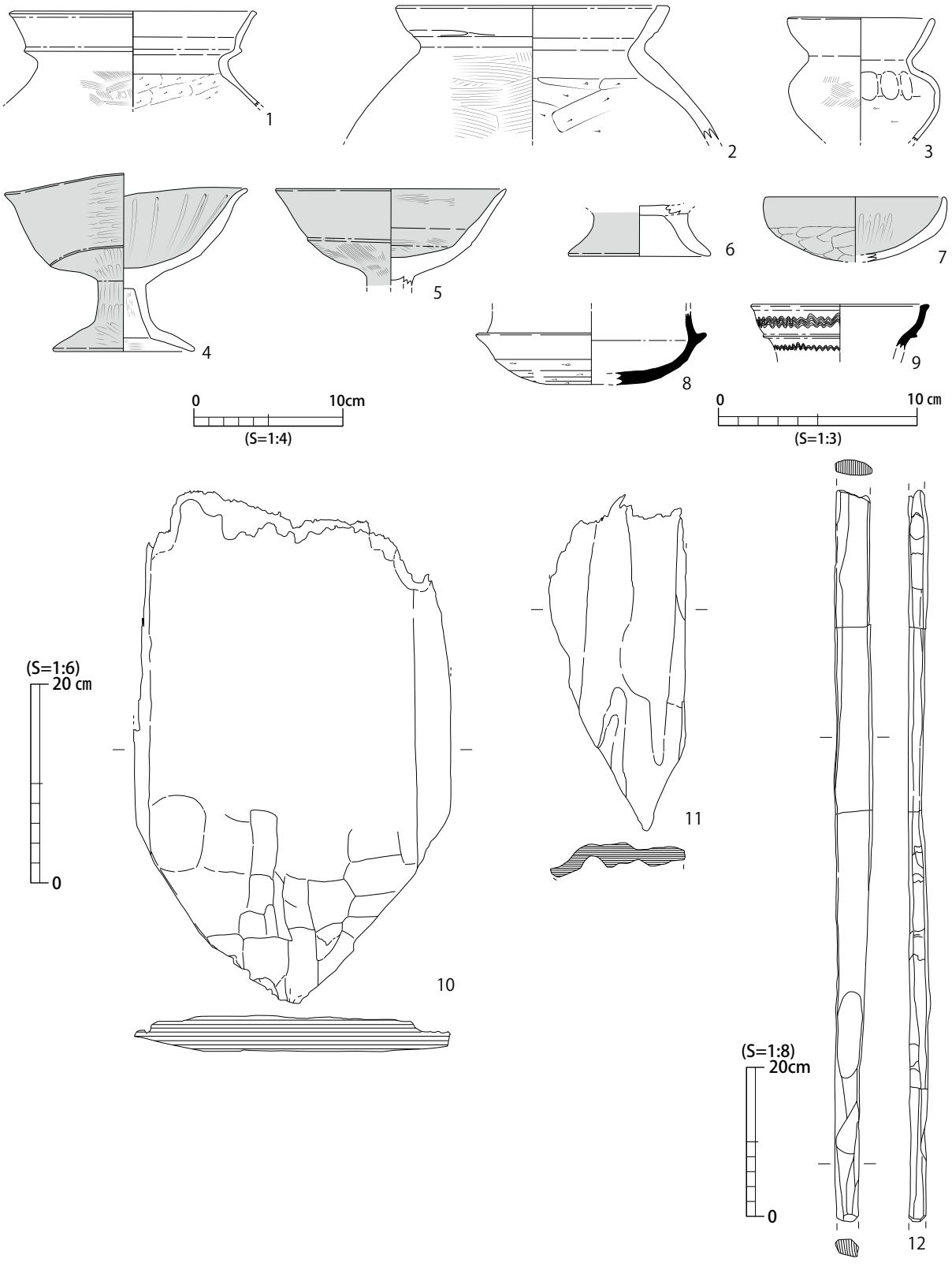
3・4 は古式土師器の甕、5 ～ 11 は土師器の甕である。1 は、少し内傾気味の口縁部に 1 本線

の崩れた波状文が部分的に描かれている。つくりは全体的にシャープさを欠いている。小谷３式以降のものか。４は口縁端部が面取りされたもので、草田７期頃のものと考える。５～39は土師器である。５～７は口縁部が退化した複合口縁のもので、段部は外面に弱い稜線が入り、内面はわずかにくぼむ程度である。８・９は口縁部が内湾気味のもので、端部が内側に肥厚している。10･11はやや外反気味の口縁部をもつ。

12は古式土師器の壷で、口縁部は内傾している。13～15は土師器の壷で、13・14は退化し



第169図　7区⑤ SD04･05



第 170 図　7 区⑤ SD04・05 出土遺物

た複合口縁を持つもの、15 は肩部にヘラ状工具の刺突による羽状文が施されたものである。

16 ～ 21 は土師器の小型丸底壷で、21 は外面全体と口縁部内面に赤色顔料（ベンガラ）が塗布されている。

22 ～ 34 は土師器の高坏である。22 ～ 24・26 ～ 30 は坏部と脚部を接続する際、坏部底面に粘土塊を充填したもので、22 ～ 24・26・29 には粘土塊に刺突痕が見られる。これに対し 25 は別々

第 171 図　7 区⑤落ち込み遺物出土状態

に作った坏部と脚部を貼り合わせて作られている。22･23 は外面全体及び坏部内面に赤色顔料（ベンガラ）が塗布されている。31 ～ 34 は脚部のみのものである。33 は外面に指頭圧痕が残り、脚裾の開きが小さく、他と比べてつくりが粗雑な印象を受ける。

35 は古式土師器の低脚坏、36・37 は土師器の坏である。36 は半球形の器形のもの、37 は口縁部と体部の境に沈線が入り、口縁部が屈折して直立するものである。

38･39 は古式土師器の甑形土器で、ほぼ同じ地点から出土しており、同一個体の可能性がある。38 は上部に横方向の把手をはめ込んだ孔が穿たれている。

40 ～ 44 は須恵器である。40・41 は坏蓋で、口縁端部に段差を持つもので、1 期遡る可能性がある。42･43 は底部に回転ヘラケズリがされておらず、大谷編年の出雲 5 期のものと考えられる。44 は大型の甕で、陶邑編年の TK23 型式以前のものとみられる。

45 ～ 47 は砥石で、45・47 は柱状の断面形を持つのに対し、46 は扁平な断面形のものである。

48 は管玉で、両面から穿孔されている。被熱による貝殻状の剥離が多数認められる。色調は青黒色であるが、被熱の影響で変色したのかもしれない。石材は不明だが、被熱により変色したものとすれば、碧玉の可能性もある。49 はガラス小玉で、色調は濃い青色をしている。

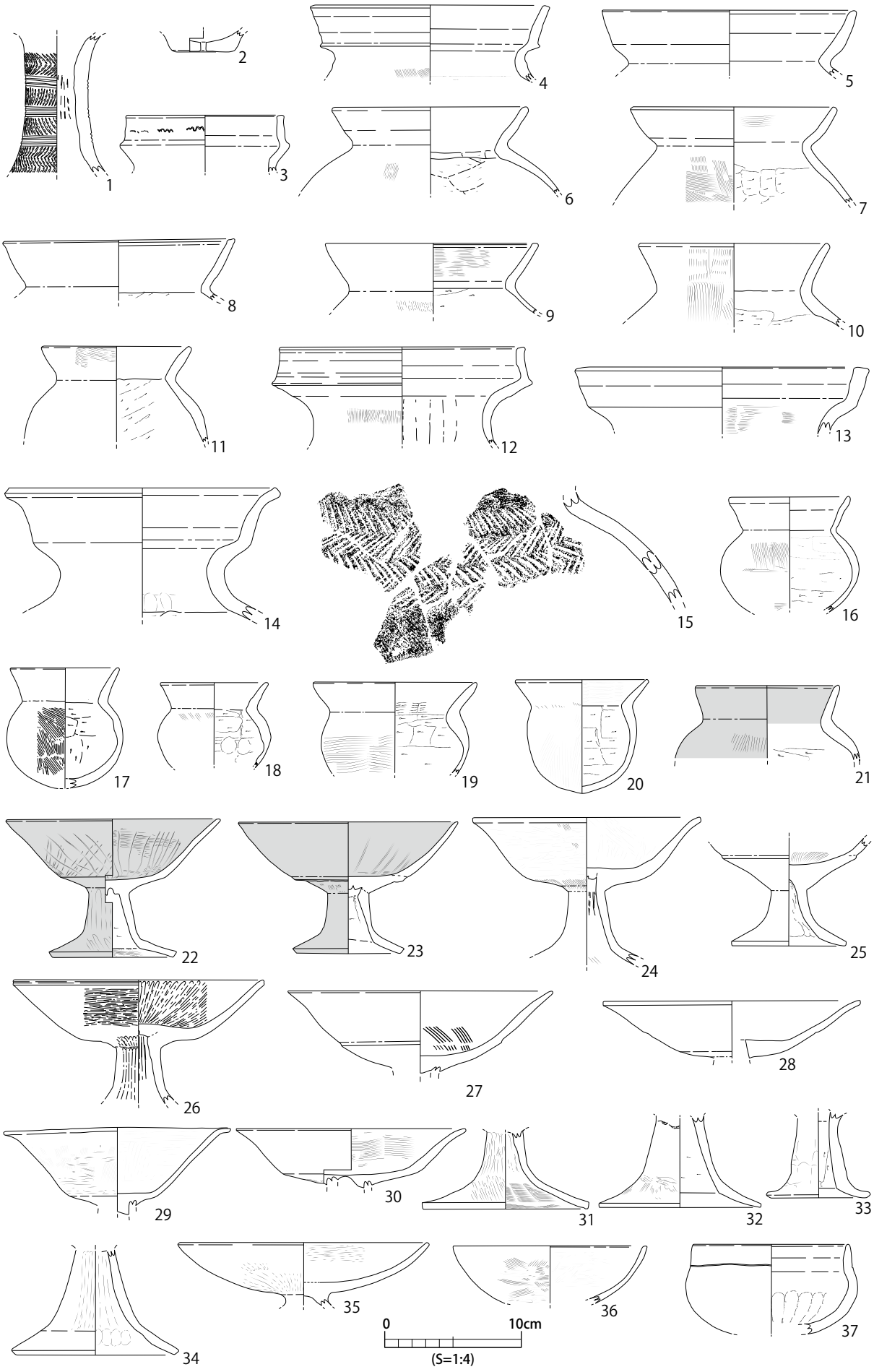
50 ～ 61 は木製品である。50・51 は三稜式木鏃で、52 は欠損部位が多く、つくりも粗いため断定できないが、その可能性があるものである。後述するが、Ⅴ層では弥生時代後期後葉～末頃の土器などと共に三稜式木鏃が出土しており、これらは本来はⅤ層に含まれていたものかもしれない。53 は棒状の木製品で、蒲鉾状の断面形を持つ。54 ～ 56 は枠型田下駄の枠材とみられるもので、これらは同一地点で出土した。57 は端部が小さくすぼまり、片面は凸面、もう一方の面は凹面になることから、舟形木製品の可能性があると考えた。ただし、凹面・凸面には明瞭な加工痕は残っておらず、断定はしかねる。58 は矢板、59 は細長い板状木製品である。60・61 は棒状木製品で、60 は蒲鉾状の断面形を持ち、先端が加工され、尖り気味になっており、61 は図面手前側に向かって次第に細くなるように加工されている。

出土遺物は古墳時代中期のものを主体としており、この時期に落ち込み周辺で人間の活動が盛んに行われたものと推測される。一部に古墳時代後期の遺物もあるが、これらは落ち込みの最終的な埋没時期を示すものであろう。

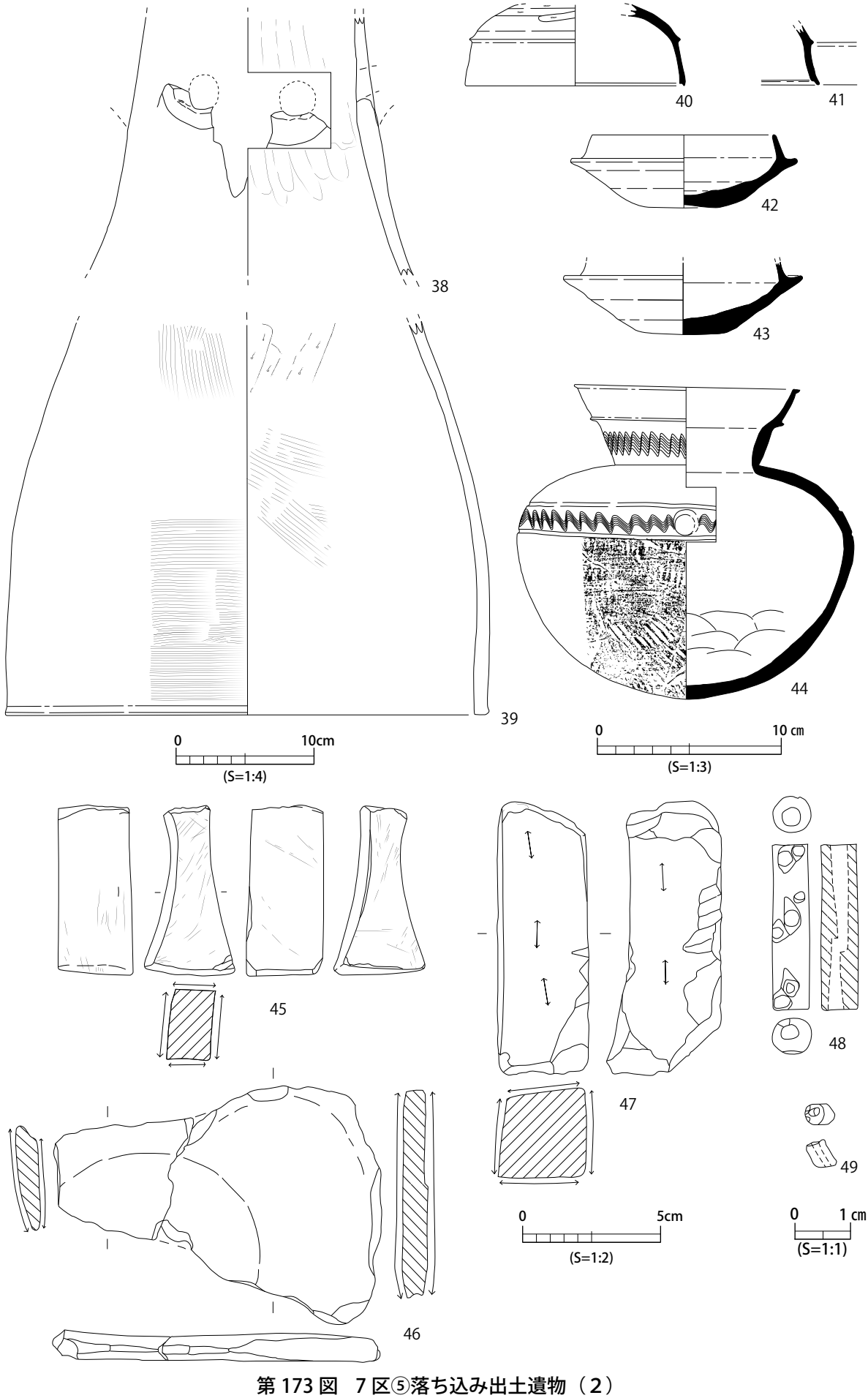
SK03（第 175 図） I15・I16 グリッド、中央区の落ち込みの内側で、島状の高まりの東裾に位置する、長さ 3.9m、幅 1.4m、深さ 0.18m の不整形な土坑である。埋土には黒褐色砂質土などが堆積し、小枝などの植物遺体を含んでいる。遺物は小片のため図示していないが、古式土師器の甕片などが出土しており、この遺構の時期は古墳時代前期に遡る可能性もある。

SK04（第 175 図） H15・I15 グリッド、中央区の落ち込みの内側で、島状の高まりの南東裾に位置する､長さ 1.3m､幅 1.17m､深さ 0.25m の楕円形状の土坑である。埋土にはシルト質の層のほか、腐植土や粗砂も見られる。遺物は図示していないが、古式土師器とみられる器壁の薄い甕胴部片が出土しており、この遺構の時期は古墳時代前期に遡る可能性もある。

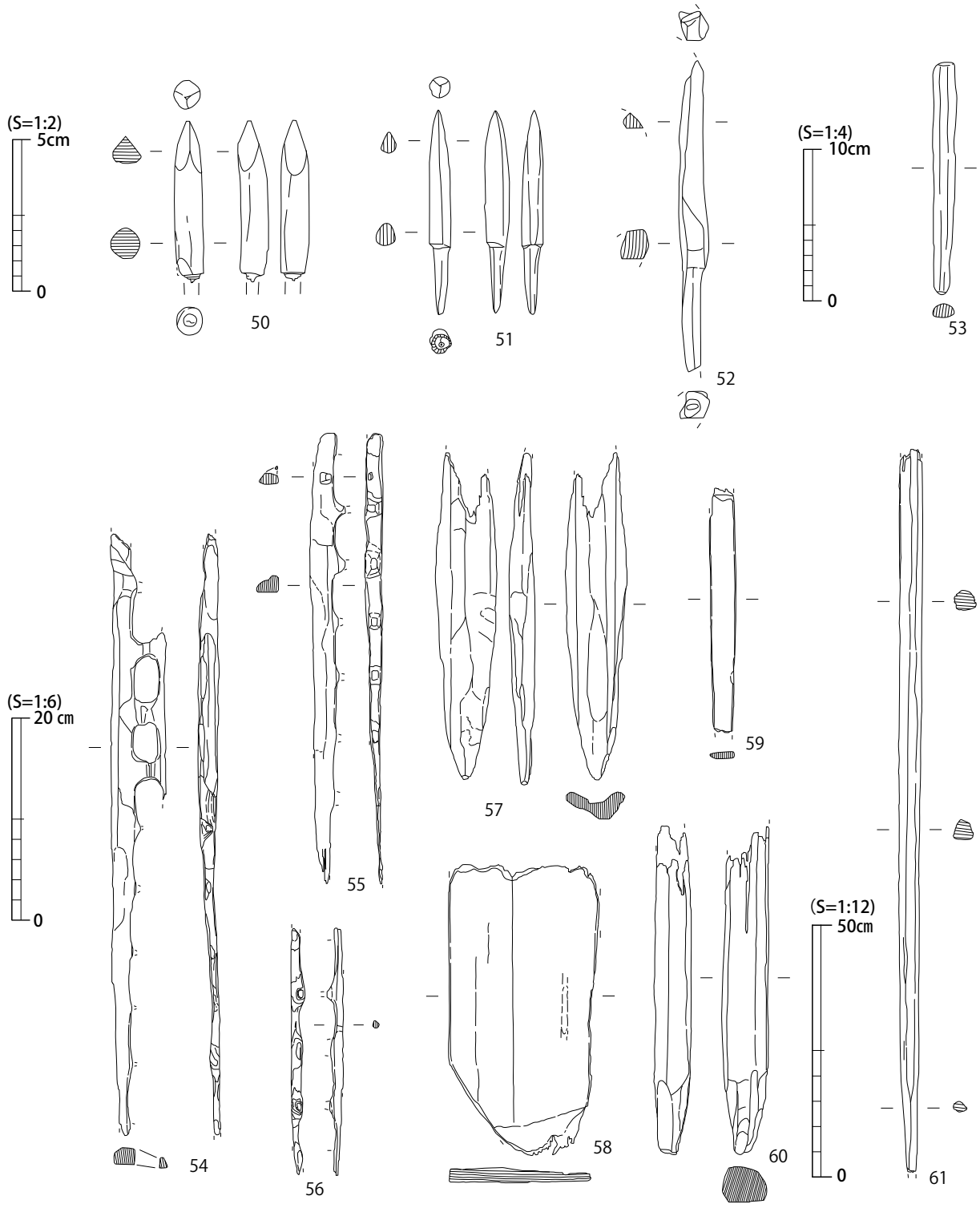
SK05（第 175 図） G14 グリッドで、西区の西端に位置し、西側は調査区周囲に掘り込んだ排水溝によって切られている。直径約 0.8m の円形の土坑であったと推定され、深さは 0.8m ある。埋土は 4 層に分けているが、黒色粘質土やシルトが入り混じった堆積を示し、人為的に埋め戻された可能性が高いものと考える。出土遺物は土器の小片がわずかに出土したのみであり、この遺構



第 172 図　7 区⑤落ち込み出土遺物（1）



第 173 図　7 区⑤落ち込み出土遺物（2）



第 174 図　7 区⑤落ち込み出土遺物（3）

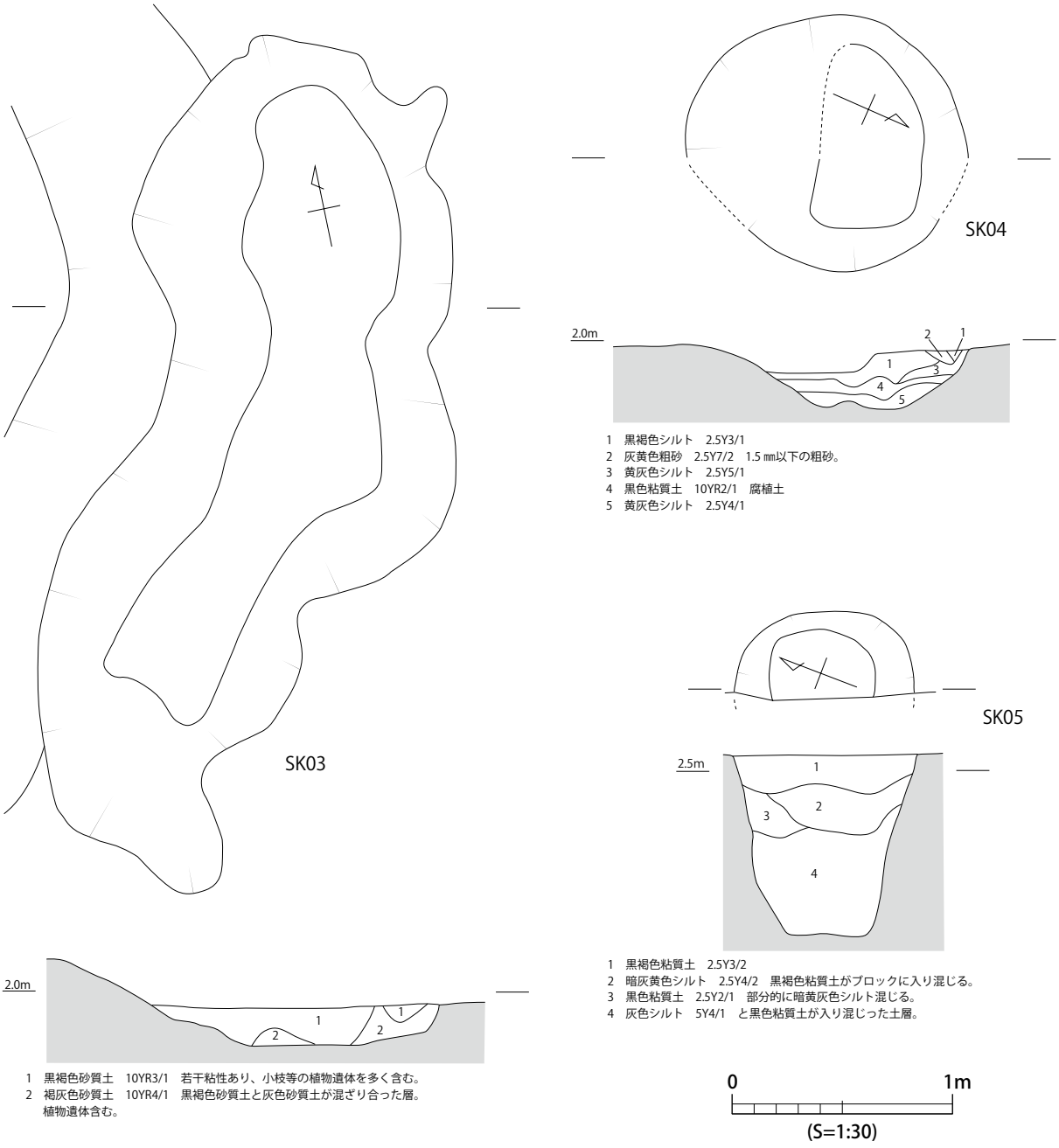
の時期を特定することはできない。

杭列 1（第 176・177 図） I16 グリッドで、SD04 の北側に位置し、落ち込み内の遺物包含層を掘削中に検出した。東西方向に長さ 4.2m で杭が立ち並んでいる。杭が打ち込まれた面を特定することはできないが、Ⅴ層にはあまり深く刺さっていないことから、少なくとも落ち込みがかなり埋没した段階で打ち込まれたものと考える。なお、杭の 1 本について放射性炭素年代測定を行っているが、補正 ^{14}C 年代で 1,430 ± 30 という結果で、発掘調査の所見とも矛盾しない。

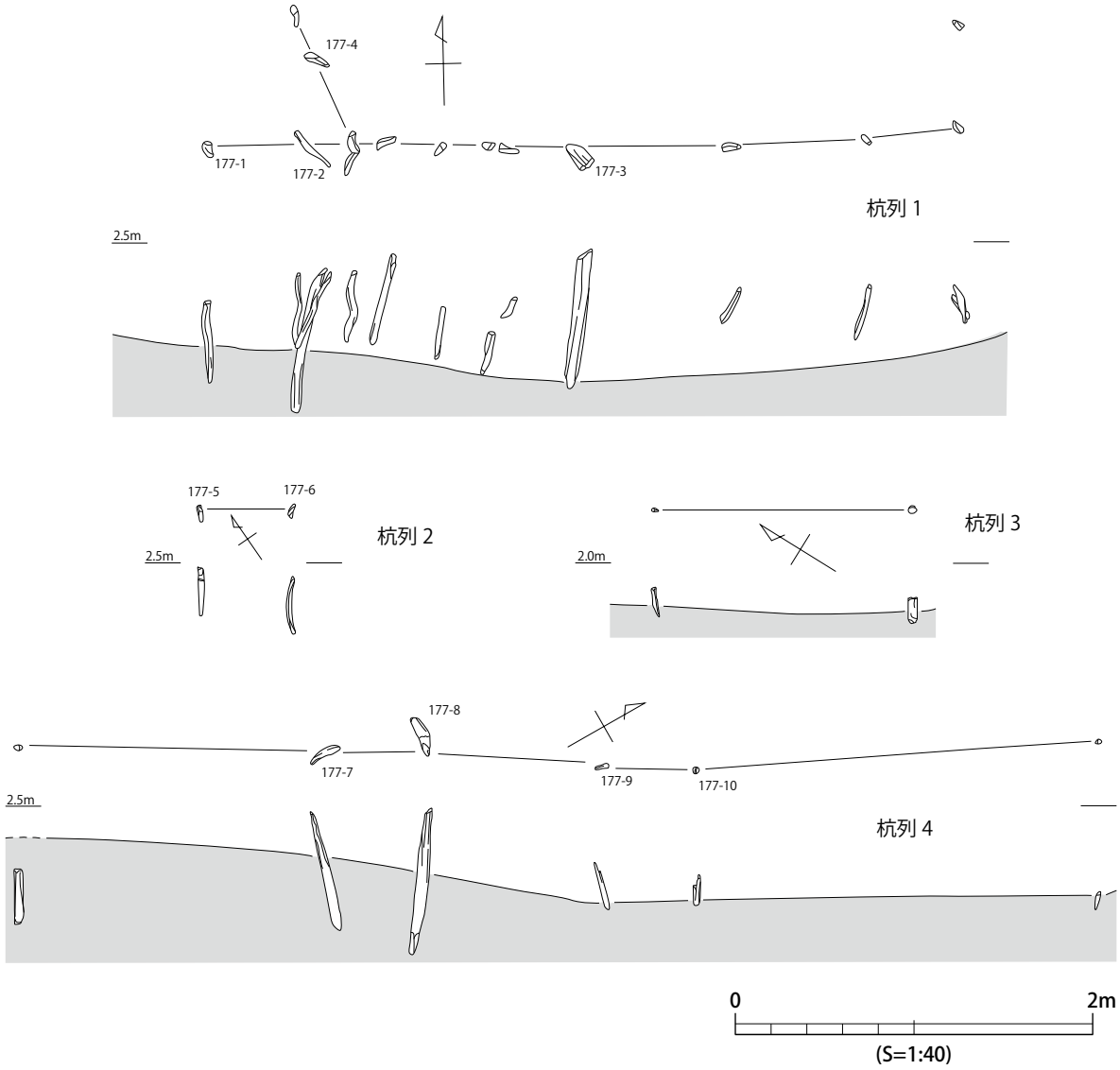
第 177 図 1 ～ 4 は杭列 1 に伴うもので、1・2・4 は細い丸太状のものの先端を加工しており、3 は太い木を分割した断面三角形状の材を用いている。

杭列 2（第 176･177 図） I13 グリッドで、西区の落ち込み内の遺物包含層掘削中に検出した。0.5m の間隔で 2 本の杭が立っているもので、杭列とするには躊躇されところであるが、ここでは一連のものとして記述する。杭の先端はいずれもⅤ層上面には達していないことから、落ち込みがかなり埋没した段階で打ち込まれたものと考えられる。杭はいずれも径 3㎝前後の丸太状の材を加工したものである。

杭列 3（第 176 図） I13 グリッドで、西区の落ち込み内の遺物包含層を掘削中に検出した。1.4m の間隔で 2 本の杭が立っているもので、杭列とするには躊躇されところであるが、ここでは一連のものとして記述する。杭の先端はいずれもⅤ層に刺さった状態であったが、どの段階で打ち込



第 175 図 7 区⑤ SK03 ～ 05



第 176 図　7 区⑤杭列

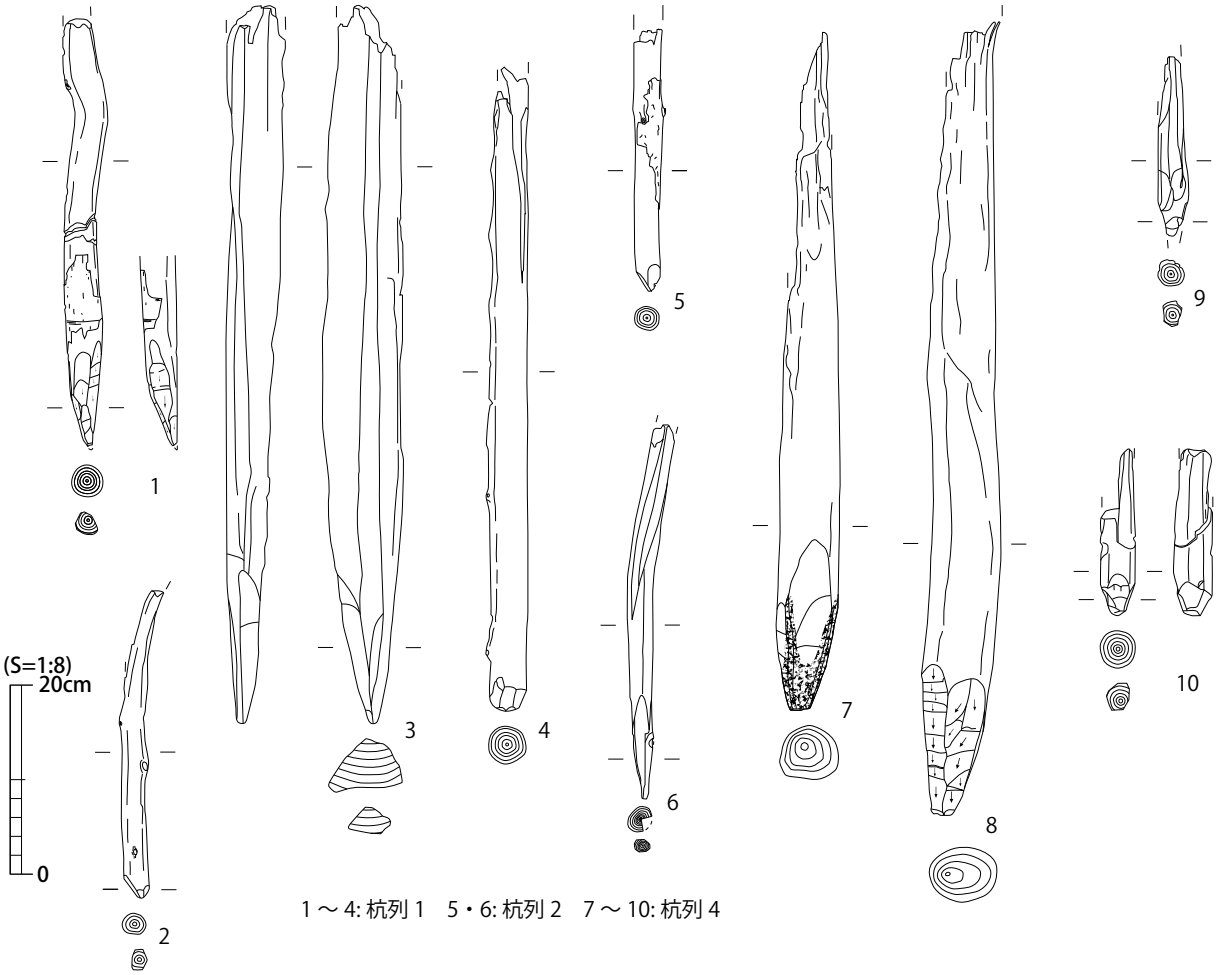
まれたのかは不明である。杭はいずれも細いの丸太状の材を加工したものである。

杭列 4（第 176･177 図）　I14 グリッドで、西区の落ち込み南側の遺物包含層を掘削中に検出した。南西－北東方向に長さ６m で杭が立ち並んでいた。杭が打ち込まれた面を特定することはできないが、Ⅴ層にあまり深く刺さっていないものもあることから、少なくとも落ち込みがかなり埋没した段階で打ち込まれたものと考える。なお、杭の 1 本について放射性炭素年代測定を行っているが、補正 ^{14}C 年代で 1,470 ± 20 という結果が得られ、調査の所見とも矛盾しない。

第 177 図７～ 10 は杭列 4 に伴うもので、７・８のように径７㎝前後のやや太めのものと、９･10 のように径３～４㎝の細めのものがある。

②遺構に伴わない遺物（第 178・179 図）

１～５は弥生土器である。１～３は甕で、１はほぼ直立する口縁部に４条の凹線が巡っており、Ⅴ - １様式のものである。２は口縁部に貝殻による平行直線文が入るもので、Ⅴ－３様式に位置付けられる。３は平底の底部で、焼成後に穿孔されている。４は壷で、口縁部に波状文が入る。Ⅴ - ２～３様式のものと考える。５は器台で、内外面に赤色顔料（水銀朱）が塗布されている。Ⅴ



第 177 図　7 区⑤杭列出土遺物

- 2 様式に属する。

6・7 は古式土師器の甕、8・9 は土師器の甕である。6 は口縁部が外反し、端部が丸みを持つもので草田 4 期に、7 は口縁端部が面を持ち、外側に肥厚するもので草田 7 期に位置付けられよう。8 は外反する単純口縁のもので、古墳時代中期頃のものと思われ、9 は口縁部と体部の屈曲が緩く、口縁部が垂直気味に立ち上がるもので、古墳時代後期まで下るかもしれない。

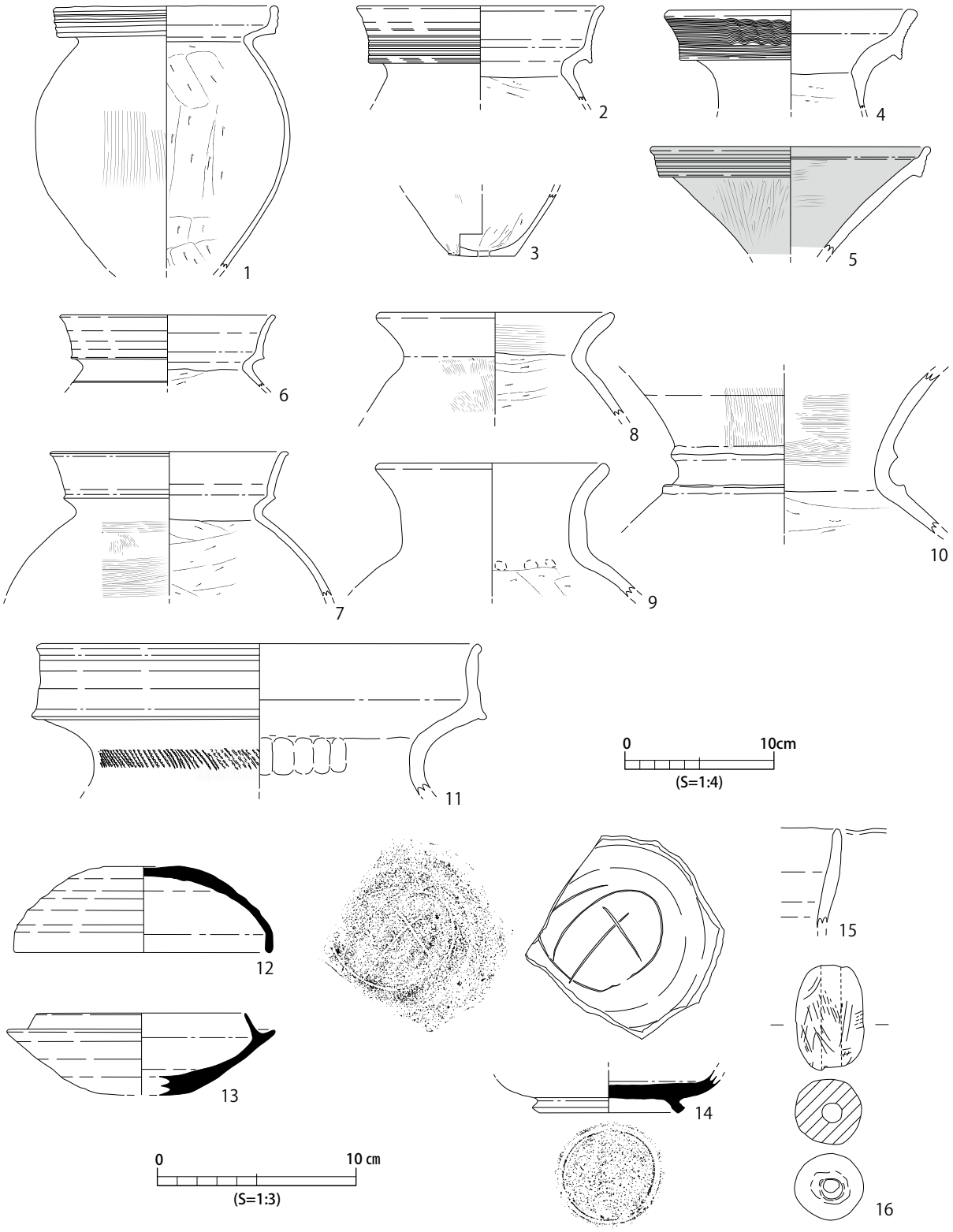
10・11 は古式土師器の壷である。10 は肩部から頸部にかけて 2 条の突帯が巡るものである。頸部に突帯を持つものは西部瀬戸内系土器に存在するが、下部の突帯が頸部付け根よりも下がった位置に巡ることや、胎土が在地のものと同じようなものであることから、西部瀬戸内系土器の影響を受けて作られたのかもしれない。11 は口縁部が若干内傾し、頸部には刺突文が巡る。

12 ～ 14 は須恵器である。12 は坏蓋、13 は坏身で、天井部や底部は回転ヘラケズリ調整がされていない。14 は高台付坏の底部で、底部切り離し技法は回転糸切りである。内面には、「○」の線刻がされたのち、さらにその中に「×」の線刻がなされている。

15 は製塩土器で、砲弾形の焼塩壷と考えられる。

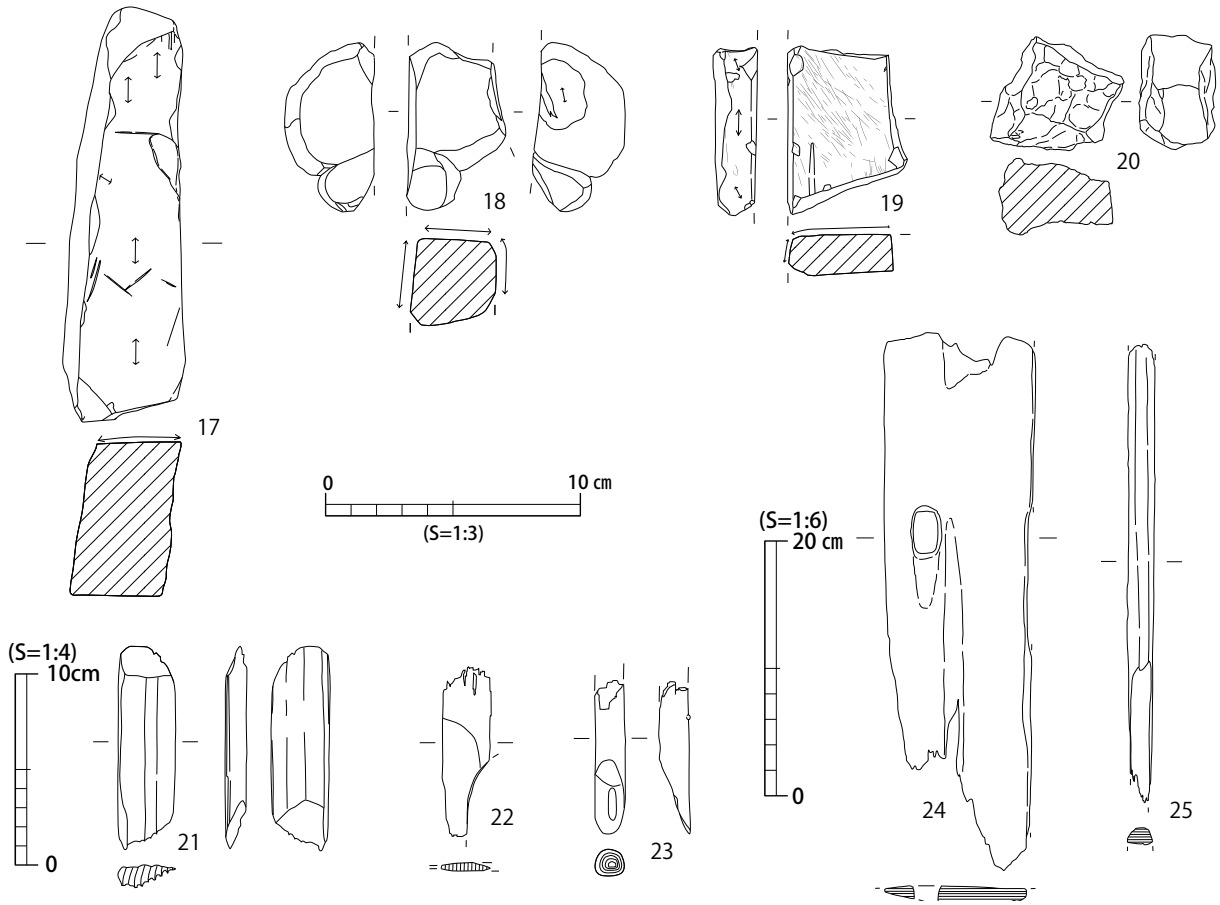
16 は土錘で、楕円形状の平面形を持ち、長軸方向に径 1 ㎝の穴が貫通している。

17 ～ 19 は石製品である。17 ～ 19 は砥石で、17 は幅の狭い長側面 1 か所を砥面としており、18 は 3 面、19 は 2 面の砥面が残る。20 は瑪瑙の原石で、図の右側面と上側面が剥離である。厚さは最大 3 ㎝で、ここから玉に加工するには小さいように思われる。



第 178 図　7 区⑤中央・西区Ⅳ層出土遺物（1）

21 ～ 25 は木製品である。21 は両側の短辺が斜めに切断された木片で、木材の加工の際に生じた切屑であろうか。22 は板状の木製品で、手前側は弧状にくびれたかたちになっている。羽子板状の形をしていた可能性がある。23 は笹竹のようなものを斜めに切断したものである。24 は板状木製品で、方形の孔が穿たれている。25 は現状で断面が半円形の棒状木製品で、何かの柄として用いられたものかもしれない。



第 179 図　7 区⑤中央・西区Ⅳ層出土遺物（2）

（3）Ⅴ層の調査（第 180 図）

中央区では、調査区周囲の排水溝掘削時にⅤ層の中から弥生時代後期の土器が出土した。このため、Ⅴ層上面の遺構の記録を終了したのち、Ⅴ層を面的に掘り下げ、遺物の出方や遺構の有無を確認することとした。排水溝では南側で多くの遺物が見られたため、南よりの約 560㎡でⅤ層の掘削を行った。また、西区でも調査区南よりのトレンチ壁面で弥生土器が認められたことから、Ⅴ層上面の調査終了後、調査区の中央から南側の約 220㎡を掘削し、遺物・遺構の有無を確認することとした。

調査の結果、遺構は確認できなかったが、弥生時代後期を中心とする遺物が一定量出土し、特に中央区の南東隅では弥生時代後期後葉の一括性の高い土器群を検出した（土器群 1 ）。

掘削深度は、中央区では標高約 1.4m、西区で標高約 1.9m まで達しており、粗砂を主体とする層（第 162 図Ⅴ - 5 層、第 163 図Ⅴ - 5 層）も認められた。この層はほとんど遺物を含まないが、花崗岩に由来する粗砂であることから斐伊川の堆積作用でもたらされたものであり、6 区の砂礫層（Ⅵ層）と対応する可能性がある。

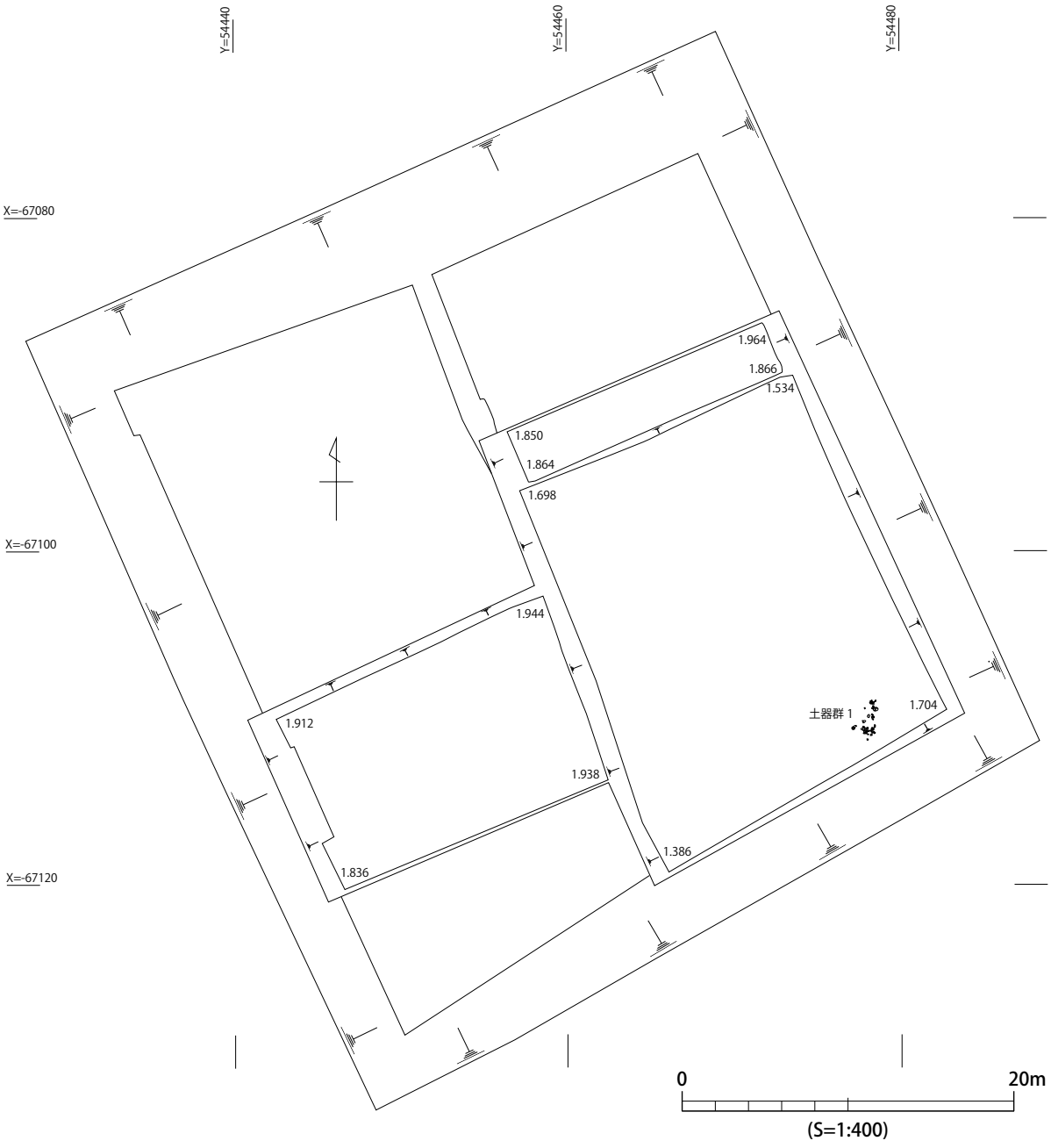
土器群 1（第 181・182 図）　中央区の南東隅で、南北 2.5m、東西 1 mの範囲で弥生時代後期後葉の土器が 1 か所にまとまって確認できた。遺物が出土したレベルは標高 2.1 ～ 2.3 mで、大きな高低差はないこと、完形に近い状態に復元できたものが多いこと、遺物は同一時期のものに限られていることから、これらは一括性が高いものと考える。また、土器群から東側に 1.4m とやや離れた地点で土錘が 1 点出土しているが、これも土器群の中に含まれるものととらえた。土器群

を検出した段階で周辺を精査したが、土坑・溝等の遺構は確認できなかった。

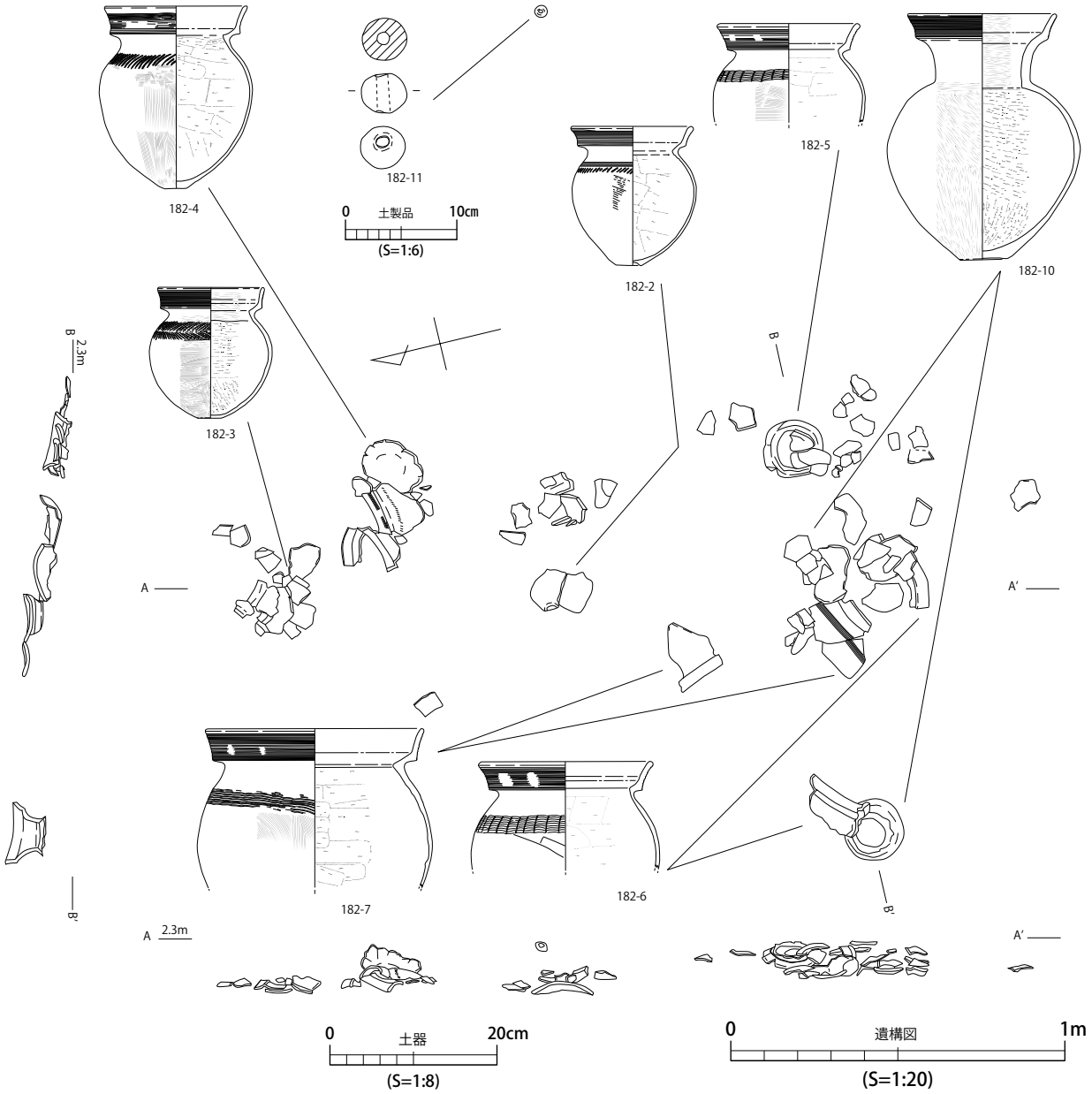
１～９は甕で、大きさから小型品（1 ～ 3）、中型品（４・５）、準大型品（６・９）、大型品（７・８）に分類できそうである。７・８は接点はないが、同一個体の可能性がある。口縁部にはいずれも貝殻腹縁による平行直線文が施され、肩部の文様は、１・３は貝殻による羽状文、４・９は貝殻による刺突文、２は貝殻による平行直線文と刺突文、５～７は貝殻による押引き状の波状文が見られる。10 は甕で、口縁部には貝殻による平行直線文が施されており、体部は球形に近く、頸部は外反しながら長くのびるもので、やや珍しい器形をしている。１～ 10 はいずれもⅤ - ３様式に相当するものと考えられる。

11 は土錘で、やや扁平な球形をしており、短軸方向に径 1 cm の孔が貫通する。

その他の出土遺物（第 183・184 図） １～８は弥生土器の甕である。１は直立気味の胴部上半か



第 180 図　７区⑤中央・西区Ⅴ層掘削範囲

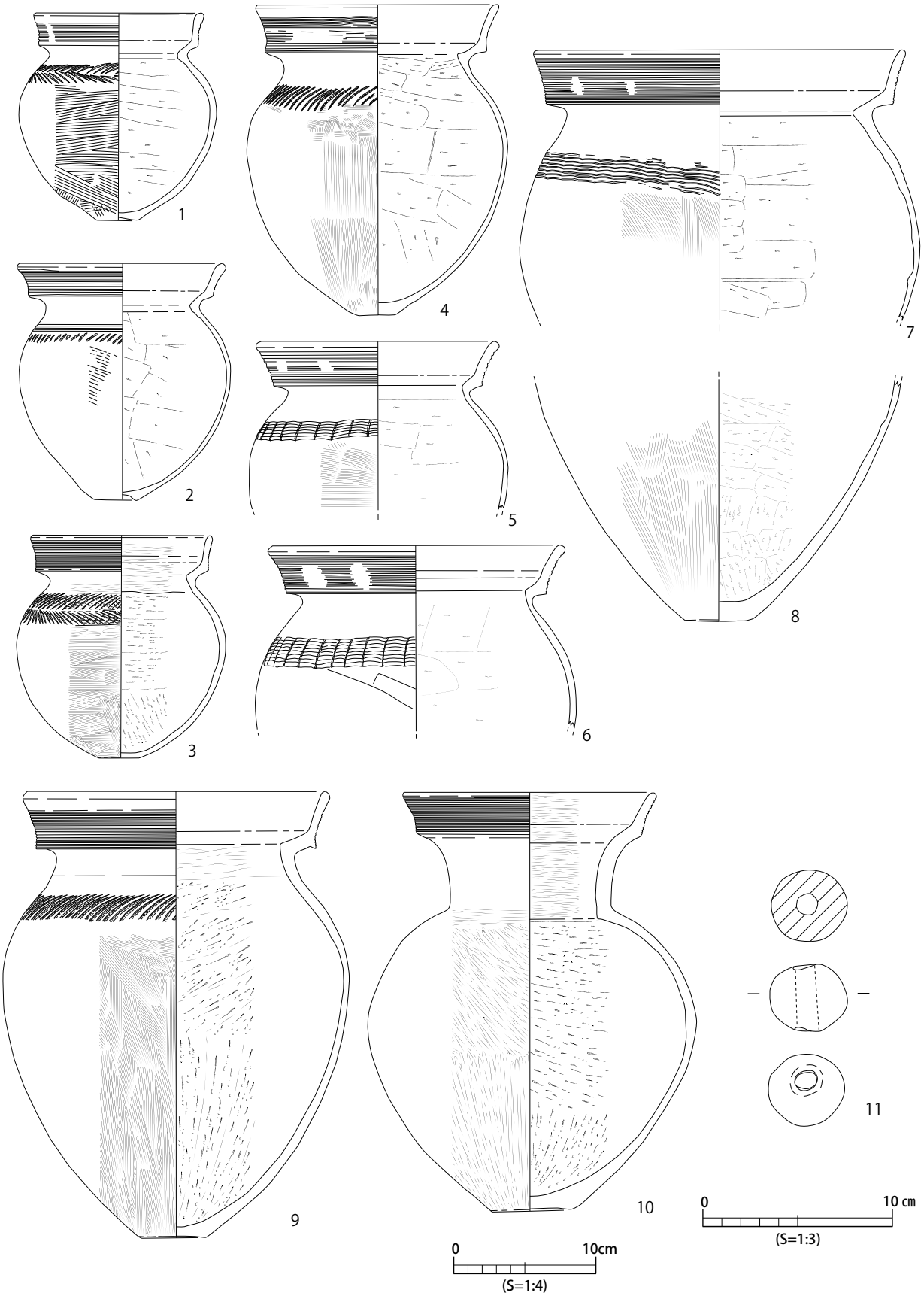


第 181 図　7 区⑤土器群 1

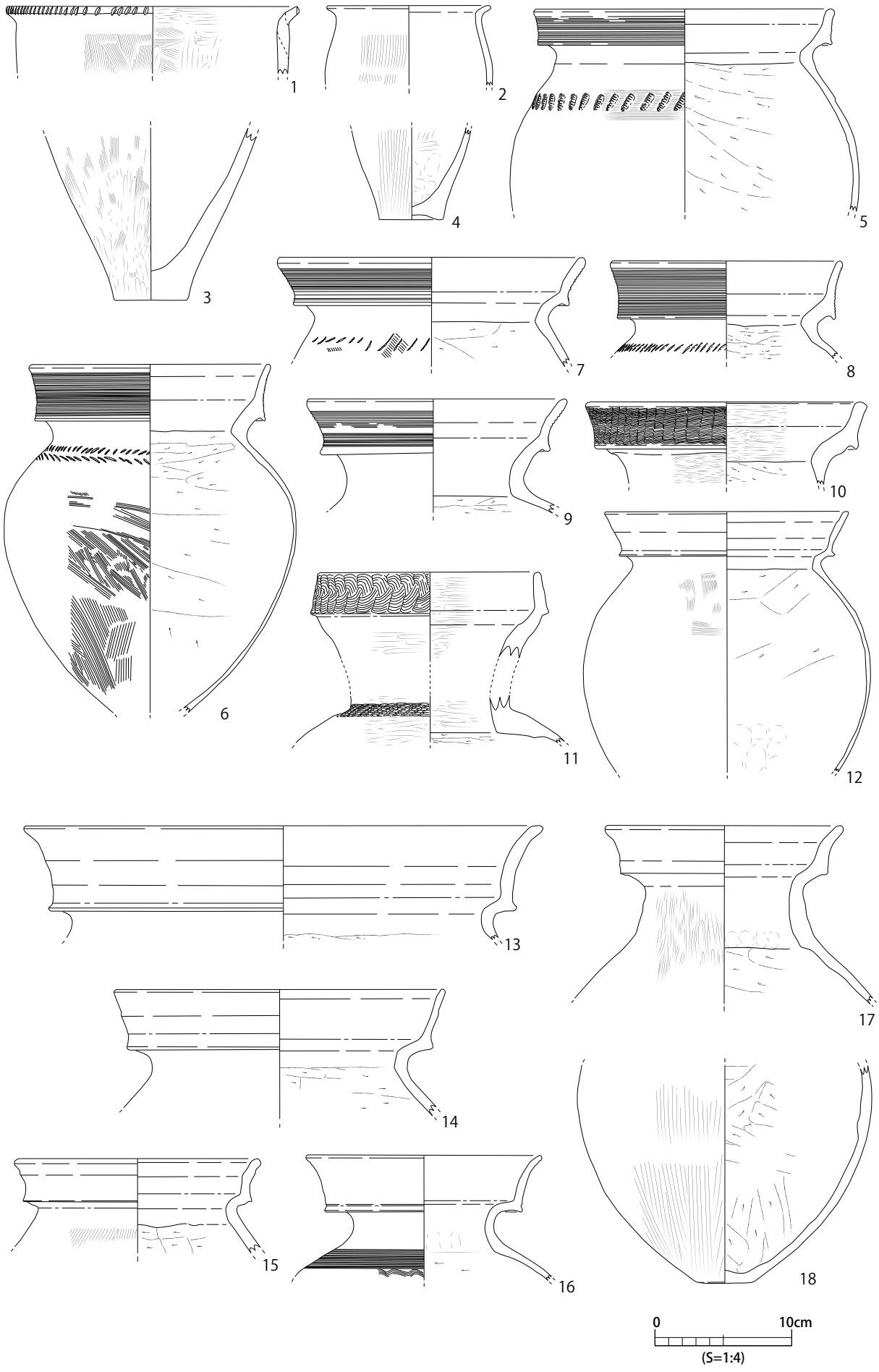
ら口縁部が外側に開くもので、口縁端部に刺突文が入る。Ⅰ様式のものである。2は胴部があまり張らず、口縁部が短く開くもので、Ⅰ～Ⅱ様式のものであろう。3・4は底部から胴部下半が残るもので、体部はあまり開かずに立ち上がる。5は、やや外反気味に立ち上がる口縁部には平行直線文が入り、肩部に刺突文が巡るもので、Ⅴ - 2様式に位置付けられよう。6～8は、5よりも口縁部が長く、外反度も強いもので、Ⅴ - 3様式に属するものであろう。

9～11は弥生時代後期の壷である。9には平行直線文が、10には間隔が密で、振幅の小さい波状文が施されている。これらはⅤ - 2～3様式のものと考える。11は内傾気味の口縁部に波状文が入るもので、頸部の付け根には貝殻刺突文が施されている。おおよその器形は西部瀬戸内系土器と類似するが、頸部付け根に文様を持つことや、口縁部の細部に違いがあり、西部瀬戸内系土器の影響のもと在地で製作したものと推測される。なお、口縁部の波状文は上下交互に方向を変えながら施文されているが、こうしたものは在地でも、西部瀬戸内地域でも例を知らない。

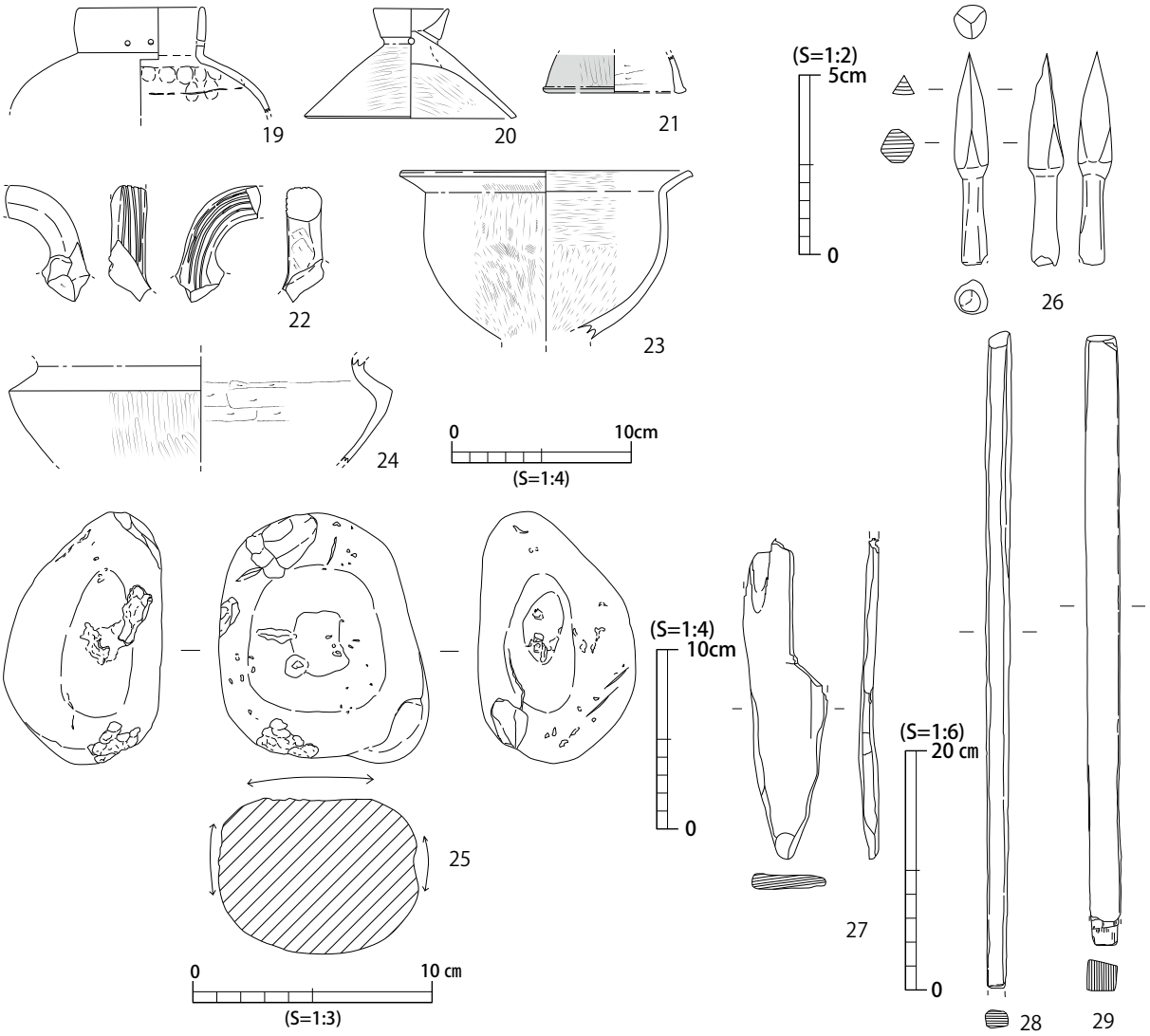
12～15は古式土師器の甕で、12～14は草田5期、15は草田3～4期のものと推定される。



第 182 図　7 区⑤土器群 1 出土遺物



第 183 図　7 区⑤中央・西区Ⅴ層出土遺物（1）



第 184 図　7 区⑤中央・西区Ⅴ層出土遺物（2）

16 は古式土師器の壷で、口縁部は強く外反して端部が先すぼまりになるもので、草田 4 期に属する。17 は口縁部が無文で、器壁に厚みのある壷で、頸部から体部上半には縦方向のミガキ調整がされている。在地の土器とするにはややイレギュラーな印象を受ける。18 は壷の底部から体部下半が残るものである。

19 は短頸壷で、口縁部に 2 孔 1 対の穿孔を持つ。20・21 は蓋で、20 はつまみに小孔が穿たれており、21 は半球形の器形をしたものとみられる。21 は外面に水銀朱が塗布されている。22 は注口土器の把手で、沈線文が入る。22 は脚付鉢で、口縁部が体部から屈折して開く。24 は鉢と思われるもので、体部上半で屈折し、稜が張り出している。備後地方南部の神谷川式のものとの類似性が指摘されており[1]、弥生時代後期前半から中頃のものとみられる。

25 は磨石・叩石として使用されたもので、摩耗した面や敲打によるくぼみや剥離が見られる。

26 ～ 29 は木製品である。26 は三稜式の木鏃で、先端は鋭く尖り、稜もかなりシャープである。樹種はコナラ属コナラ亜属クヌギ節である。27 は板状木製品で、先端がすぼまるかたちに加工されている。28・29 は棒状木製品で、断面形は方形になっている。（東山信治）

1　伊藤実氏の御教示による。